
神野森人は拳で戦う

鯨岡 啓介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神野森人は拳で戦う

【Nコード】

N7818L

【作者名】

鯨岡 啓介

【あらすじ】

神野森人は幼馴染霧島岬と同じ学園へと進学した。

舞台は戦争の中の国。
軍人を、優秀な魔術師を育成するための学園　ここに幕は上がった。

霧島岬は天才であり、神野森人は天才ではない。

だから神野は努力をした、リスクを受け入れた　天才達の戦う領域に辿りつくために。

勝てませんでした、かないませんでした、守れませんでした　そ

んな言葉をはきたくない。

ならどうする？ 勝つしかない、秀才、異才、天才、異端 どんな
相手だろうと勝つしかない。

prologue

「……合格してるぞ、おい」

俺こと神野しんの 森人もりひとはそう呟いた。

校舎の玄関口に張り出された合格発表者一覧を二度確認し、いやそれでも信じきれなかったので三度確認し ようやく本当に合格できたのだと確信できたときにはガッツポーズをとっていた。

「いよっしゃあ！」

俺はやりましたよ先生！

瞳を閉じて強く拳を握り締め感慨にふけっているとトントンと肩を叩かれた。

「神くん神くん、あのね？」

振り返ると頬をほんのりと朱に染めてはにかんで笑う幼馴染の霧島りしま 岬さきがそこにいた。

「公衆の面前で恥ずかしいから死んでくれない？」

訂正しよう。

振り返ると（罵倒された結果落ち込む俺を予想し）朱に染めてはにかんで笑う腹黒幼馴染の霧島 岬がそこにいた。

「……ん、んっ」

軽く咳払いをし、引きつりながらも微笑んで返す俺。

「ご、合格できたんだし多少の暴言には目をつむるうじゃないか。」

「その表情気持ち悪い」

笑顔のまま毒を吐かれる、当方引きつった笑顔のまま固まる。

「あ、ははー」

漏れ出した笑い声のなんともまあそらぞらしいこと。

「……あ、そのごめんなさい」

と、突然岬が笑顔を曇らせ、本当に申し訳なさそうに言う。
整った容姿　というよりは大人の容姿だろうか　をした岬が
申し訳なさそうに表情をゆがめるのは、正直いってほんの少しドキ
リとした。

「表情じゃなくてもそもそも顔が気持ち悪いわ」

「ポニーテール引つ張るぞこの野郎」

「ご、ごめんなさいっ、でも私嘘はつけなくて」

さきほどの表情はどこにいったのやら、口の端を吊り上げてしつ
つニヤニヤと笑う岬。

ああくそ　その表情が苦痛どころかむしろうれしいと思え
る俺がいやになる。

なぜならすべてこれは、

「……頼むから照れ隠しはそれくらいにしてくれ」

「あら、やっぱり分かる？」

「わからないでか、だってさ」

『幼馴染だから』

ポリポリと頬をかきながらいった俺と、
満面の笑みでそういった岬と、

数秒見詰め合って、やがてどちらともなく右手を上げハイタッチ。

これからもよろしく、と互いに言った。

「ああ……言い遅れたけれど、合格おめでとう」

さあ、学園生活の幕開けだ。

prologue (後書き)

初投稿です、どうかよろしく願いします。

感想お待ちしています。

あ、私は短めの文書でこまめに更新するタイプです。

入学式前夜

「しっ、はっ！」

公園の街灯が淡く照らす中、教えを反復する。

左拳を突き出し、すばやく引き寄せる。

打点は一撃ごとにずらし、敵の意識を分散させる。

早く、速く、疾くだ！

左、左左、左左左左、7撃打ち込んだところで呼吸を吸い、

一瞬の間　その間に敵に逃れられたと想定し、踏み込む。

「神くん」

聞きなれた抑揚の少ない声でイメージが霧散した。

「ふう、はあ」

ドツドツと心臓が音を立て、手足が若干重い感覚がする。

「んーどうした？」

振り返るとやはり岬がいた。

青色のGパンに黒い無地のTシャツ　なんともまあ男らしい格

好で。

Tシャツの上からでも存在を主張する胸部と腰まで届く黒のポニーテールが女性を主張しているから、男らしいというよりは凛々しいがただしいのかもしれないけども。

「食事、おばさんが呼んでるわよ？」

春の少しだけひんやりとした夜風が汗をかいた肌に心地いい。

公園の中にまばらに生えた木が生み出すザツ、ザツという葉がこすれあう音も心地いい。

「……あれ、もうそんな時間か？」

嘘だ、本当はもう7時なのだと知っていた。

「……もう少しだけ、時間が必要？」

嘘を見抜かれた上に気遣われた。

「うん、悪いけど、もうちょっとだけいいか？」

慣れ親しんだ公園を見回す。

ピンク色のゾウの滑り台。

アスレチック。

シーソー。

砂場。

そして今俺がいる街灯の少し先、何も無い空間。

「……………」

そこに先生が昔いた。

教えを請った／鍛えられた／拳でかたりあった／笑った／泣いた

／語りを聞いた／悩みを打ち明けた／考えあった／答えをだした

断片的な過去を思い出していく。

「ありがとうございますっ！」

頭を下げる、思い出しすぎて不覚にも泣きそうになっていた。

「神くん、恥ずかしいわね」

「うるせえ、よ」

ほらいくわよといって彼女は俺を引っ張っていく。

ああくそ、情けない。

気遣われてるじゃないか。

彼女が毒を吐くのは、嬉しい時、悲しい時、氣遣うとき、対応に困ったとき、あとはあれだ……単に身内をいじりたいときだけでも、この場合がどれかなんて考えなくても分かる。

先生、分かりきってたことですがどうも俺はまだまだ未熟なようです。

夢

これは夢だ、否、夢で見ている記憶だ。

その証拠に先生の輪郭は曖昧、背景は公園だがこれまた輪郭がぼけている。

そうそう、あのときは夕方だったなと思い出すと、空のいっそう赤みが増した気がした。

「なあおい坊主　こういうのもあれだが、お前はよくがんばっていると思うぞ」

訓練が終わったとき、先生が頭をガシガシと掻きながらそういった。

「そう、ですか？」

嫌な予感がする。

木にかけてあった白いコートを羽織りつつ先生はけどなと続けた。

「お前は俗に言う秀才ってやつなんだろうな、努力すれば努力しただけ強くなっていく」

「……………」

間が空いた、沈黙だ。

体感的には30分ほど、多分実際には2分かそこら　先生が気まずそうに口を開いた。

言わせてはいけないと頭の中でこえが叫んでいる

「5年教えて、それでようやく分かった。
お前に嬢ちゃん守るのは無理だ」

「お前が弱いんじゃない、断じてだ。

ああ、俺が保障してやるよ」

「なら　！」

「ならも何も無いんだよ、いいか坊主　いや神野」

「あの嬢ちゃんはな、天才だ。

違うな、天才っていう枠組みにも入りきらない。

強いて言うなら答えだ」

実例をあげると、そうだな……と先生はいった。

「10段階評価の能力テストってのがあろうか？

あれはかなり優れているってところまで図るものであってそれ以上を図るものじゃない。

だからこそ嬢ちゃんは今無名なんだろうけどな。

それでも評価をつけるなら、だ。

ああ、俺はてつきり嬢ちゃんは15段階とかそれくらいだと思っ
てた。

とてつもなくすごい、陳腐な表現だがそのくらいだと思ってた。

秀才が努力し続ければいつかいたれるであろうくらいだと」

「あの嬢ちゃんはな、自分が異常なのだと理解できているから

それで加減をしているっていうのに15段階を取ってしまった……
んだよ」

そんなこと、ずっと前から知っていた。

気づいていた、俺では彼女のいる場所まではたどり着けないとい
うことも。

それでも面と向かって言われたく、気づかされたくはなかった。

すうと息を吸う。

ゆっくりと吐き出す。

思考する、思考する、思考する。

答えは決まっていた。

「それでも、です」

彼女を守るのだと。

「……ふん、ああそうだよな神野　いや坊主、お前ならそうい
うと思っただ！」

はっははははは！と何がおもしろいのか先生は腹を抱えて笑って
いた　殴っていいだろうか？

「ああ関係ない、関係ないよな坊主！

男が女を守るのにそんなことは関係ないよなあ！」

気に入った、いや違うな気に入ってたのだから目が確かだったと
でもいうべきか？など先生は訳の分からないことを言った後。

ふむ、と不意にまじめな顔をして、

「嬢ちゃんの希望は崎守学園だったな？」

確かにそこが第一希望だと聞いた。

というよりも推薦ですでに受かっているのでそこにすすむらしい。

「なるほど……確かあそこは魔術師を育成する学校としては最高クラスの場所だ。

10段階中8段階以上の高評価をつけるようなやつらが進むんだろつから評価の限度もあがるだろつな。

14段階、15段階 細かい数値なんてものは知らないがまあそんなところだろう。

それが崎守学園の限界だ。

ああ、だから坊主」

「とりあえず15段階になれば、無理とはいわないだろうし言わせない」

俺はこくりとうなずいた。

おはよう神くん

結局のところ俺はどの程度まで強くなれたのだろうか？
夢から覚めるときそんなことを思った。

「……ん」

ゆっくりと瞳を開けると白い天井。

ああ、とつぶやいて思い出す。

今日は入学式だ。

「おはよう、神くん」

「ああおはよう岬」

上半身を起こしつつ左手に向く。

視線を向けるのは部屋の片隅に置かれた勉強用机。

ギツ、と音を立ててその前のイスに岬は座っていた。

文庫本を片手に足を組んでいる岬を見て、もしかすると俺よりもそこに座っている時間が長いのでは？なんてくだらないことを考えた。

そんなことを考えてから気づく、岬は制服だった 見慣れたものではなく崎守学園の。

胸元にユニコーンが刺繍されたブレザー、それとこれが決定的に違うのだがスカートではなくズボンなのである。

まあ、スカートで飛んだりはねたりしながら戦闘はできないよなそりゃ。

「……ん、ん」

両手を天井に向け、ゆっくりと伸びをする。

ゴキゴキと間接が音をたてて、はぁーと息を吐くころには眠気はとんでいた。

さて、とつぶやいてベッドから抜け出す、ついでカーテンを開けて日光を取り入れる。

ベッドに戻り、毛布をたたみ、その脇に腰掛ける。

「……………」

時計が指し示す時間は6時。

いつも通りの朝だ。

「……うん」

パタンと小さな音がした。

岬が文庫本を閉じた音だろう、そしておそらく区切りのいいところでおりを挟んだんだろう。

「お待たせ、神くん」

「いつも言ってるけどな、岬の方がまってるだろう?」

たまに30分ほど早起きしても先はそこに座っているのだ。

ちなみに我が部屋の本棚は岬の文庫本によって大多数を占められている。

「私はいいのよ、習慣だから」

「なら俺もいいんだよ習慣だからな」

「あらそう？なら問題はないわね、それに楽しいのよ、神くんの寝顔を見るのも」

満面の笑みでそんなことを言われた　　まで赤くなるな神野森人！
あれは悪女の笑みだ、つまるところからかわれているのだ！

「そう、かよ」

視線どころか顔までそらして俺はそういった　　ああ、くそ分かってる。

「やっぱり照れた顔を見るのも楽しいわね」

「勘弁してくれよ……」

クスクスと笑う彼女を見て思う。

まあいいか……

「とにかく、朝食をとろうぜ」

はあ、とわざとらしくため息をつくと同時に俺は言った。

立ち上がりドアノブを回し　　まあいいかなんて思えたとしても
変えられないものがあって、

「あ、ちょっと」

うるさい、まだ顔が赤いんだよこっちは！

あせって降りていると思われぬように、かつ迅速に俺は階段を降り始めた。

家庭事情

「森人、おはよう」

リビングの扉を開けると同時、こちらに背を向けて母さんがそついった。

今日もまた早いらしく既に服装はスーツだ。
鏡の前でネクタイを締めなおしている。

「おはよう母さん」

言ってから暫く母さんの背中を見つめ続けていた。

「食べないの？」

背中を向けたまま母さん。

その言葉で我に返り、

「ああいや食べるよ？」

言ってテーブルにつく、硬い木の背もたれに寄りかかり、待つ。

「おはようございます、雪^{ゆき}さん」

「おはよう、岬ちゃん」

岬がリビングへとやってきて、俺の右隣に座った。

長方形のテーブルは大きく、イスは四つ。

朝食のトーストがおかれているのは俺のところと岬のところだけだ。

母さんはいつも通り先に食べたのだろう。

俺は、俺は……あと一つの席がうまったことを一度もみたことが

ない。

「……、いただきます」

「いただきます」

パンと手を合わせてからトーストにかじりつく。

ほのかに暖かいそれはカリっ、と音を立て飲み込まれていく。

「……………」

無言の食事、なぜならそれは本来あるべき人がいないからだ。
だからいつもはただ黙々と食事を進める、そういつもは。

「森人、本当にいくの？」

既に母さんの手は止まっている、それでも動かず、こちらに背を
向けたままそう問うた。

ゴクリ、とトーストを飲み込む。

「うん、いくよ」

きっと母さんは崎守学園にいくだとか学生寮に住むだとかそんな
ことを聞いているのではない。

引き返せなくなる

そういつているのだ。

「……………そう、そうなのね」

「……って母さんは言葉を止めた。」

「……ってらっしゃい森人、きつとお父さんもそう言つと思つわ」

「……そう、かな？」

「……いつつ、思わず隣を見てしまった。」

「……岬は瞳を閉じていた。」

「……表情はない。」

「……俺には岬がどのように思っているかが分からない。」

「……そうよと母さんはいつて、さて、と繋げた。」

「……私はもういくわ、貴方も 神野森人もいつてらっしゃい」

「……つ、いつてきます、その、母さんもいつてらっしゃい」

「……視線を戻せば母さんは背中を向けたままドアノブを回し、やがてガチャンと玄関の扉が閉まる音がした。」

「……ごちそうさま」

「……ああ、ごちそうさま」

「……おそらく待つていてくれたであろう岬。」

「……なあ、岬」

「……待ち合わせは十分後でいいかしら？」

「……遮られた、馬鹿か俺は いったい何を聞こうとしてたんだ？」

「……ああ、そのくらいでいいよ俺は男だからそんなに時間はかからな」

いしな」

とはいえ歯を磨いて寝癖を整えて制服に着替えてというところと割りときりぎりなのだが。

多分岬としてはそれをねらったのだらうけど。

さて、気持ちを入れ替えよう。

玄関から出ると岬がいた、お待たせというところとあちらは今来たところだと言い、

「男女が逆だな」

「まったくな」

ふむ、と行って苦笑しいい、

「さて、行こう」

「ええ、行きましょ」

言って並んで玄関を出る。

出た後に一瞬、ほんの一瞬だけ振り返った。

住み慣れた我が家。

その表札、

霧島

「忘れ物は、ないよな……」

神野森人の父親は霧島きりしまいっお五雄である

神野森人と霧島 岬に血縁はない

霧島 五雄は既に死んでいる

霧島 岬は霧島 五雄及び霧島 雪に血縁はない

己は霧島 森人ではなく神野 森人である

当たり前前のことを思い出す、それ以上のことは思いだささないことにした。

「私はないわよ」

「ああ、俺もない」

そう返すと同時俺はゆっくりと歩だす。

並ぶように岬。

少しだけあるくと隣の家の表札が見えた。

霧島

神野 森人と霧島 岬は幼馴染である

とても大切なことを確認した、ああ今日も一日がんばれそうだ。

電車に乗り駅で降りて見上げるは……

「うーん、案外人がすくないんだな」

さかいし 境市で降りたとき俺はそうつぶやいた。

電車の中でもそうだったけれど人はまばらだ。

以前見たとおり駅前だというのに活気がない。

並んでいる店も食堂や雑貨屋が大部分を占めている。

「そうね、新入生三百人ついても入学式は午後からだから……
近くにいる人はもう少しあとにくるでしょうし、寮に住む人は多分
前日には入寮してる人が多いからじゃないかしら？」

要するに中途半端な時間なんだろう、何もない駅前の広場にポツ
ンと一つだけたっている時計をみれば10時を指していた、入学式
は1時からだから確かに微妙な時間だ。

さて、現実を見よう。

ぐるりと首を回す。

崎守学園へと続く道。

二車線の道路はきれいに舗装されている。

……問題は30度ほどの坂道が3キロ続いていることだけでも。

「……これ登るのに魔術つかっちゃいけないっていうのは絶対にお
かしい」

「追突事故で捕まりたいのならご自由にどうぞ？」

走っている最中に肉体強化をして時速100キロで走って人にぶ
つかったとすればそれは立派な追突事故である。

当然のことではあるけども常時自分に防護魔法をかけている人は
いないので、下手をすれば殺人事件にまで発展する、するのだが、

「 イイイイイイイイヤツホおおおおお! 」

「 ……おいおい 」

「 ……信じられない 」

踵から火を吐き出しながら（恐ろしいことに比喻ではない）ものすごいスピードで車道を登っていく赤い長髪の馬鹿がいた。まるでスキーでもしているかのような姿勢で、だ。

「 ひゃっはあああああああああああああああ! 」

明らかに時速150キロは超えている。

下手をすれば殺人事件どころの騒ぎではない、下手をしなくともぶつかれば殺人事件だ。

驚いている間にその姿が霞んですぐに見えなくなった。

「 あのさ 」

「 ええ 」

「 俺、ここでやっていけるのか先行き不安になってきた…… 」
「 ……奇遇ね、私もよ 」

となりを見れば岬が引きつった顔でこちらを見ていた。

「 さて、普通に登ろうか 」

「 ええ、そうするのが一番ね 」

よつこそ崎守学園へく学生寮編

「……自宅通学組みは毎日これを登るのか」

まっすぐ続いていた坂道もようやく終わりが見えた。

「でしょうね……疲れるとまではいわないけれども、正直億劫になるわね」

「けどまあ……その、受験と合格発表をみにきたときも思ったけど、やっぱりすごいな」

俺は視界の先にあるものを見つめていった。

「……それは学園が？学生寮が？それともどちらともかしら？」

右手側に崎守学園。

左手側に崎守学園学生寮。

最初にここに来たときに想像できていたろうか？

「当然、どっちもだよ」

まずは学生寮、普通の寮というとマンション程度の大きさなのだが……そんなレベルじゃない。

というか母校の中学校よりも大きい。

赤いペンキを塗られた壁が続く続く続く　控えめに見ても30

0メートルはある。

ついでに玄関も四箇所にある。

何の飾り気も無く窓だけがところどころについているだけの建物だが、そのあまりの長さに地味などとはとても思えない。

そういえば、一緒の受験会場にいた人がこんな風にたえていたかななどと思いつく。

「電車」

高さ15メートル（推定、なお高さは六階）横幅300メートル（これまた推定）の赤い建物なので、なるほど遠くにいればそう見えないこともない、むしろ違いといえば窓が全体像がみえるほどの遠くからみると小さすぎて見えにくいくらいだ。

「なるほど、確かにそんな感じがするわね　なら校舎のほうは？」

あの言い方は受け売りであって俺が考えたわけじゃあないんだけど、はてさてどうしたもんかと考えつつ　んー、とうなりを上げる。

「ダメだ、普通の校舎としかいえない。

いやまあぜんぜん違っつてのはわかってるんだけども」

あれが普通なら普通の校舎は一般家庭になってしまう。

「……うん、なんとなく思いついたわ。

ほら住宅の集まりを集合住宅っていうでしょう？

あれと同じよ」

集合校舎

「それだ！」

校舎は普通なのだ。

ただし北と南に分かれている校舎が四つある。

北東、北西、南東、南西　それぞれにプールがあり、体育館が

二つあり、校庭がある。

何故坂道が3キロも続いたのか？

答えは簡単だ。

ひたすらに校舎がでかいのだ。

「……ふむ、あるいはマンモス学園などと呼ばれているな」

抑揚の無い声が聞こえた、ただし男の。

「なるほど、確かにその通りですね」

……、

……、

「あの、」

振り返れば学校指定の制服を着た男子生徒。

長身、短くまとめられた黒髪、物静かな瞳

ふむ剣道でもやっ

てそうだなと考えながらも、いやいやまてまて誰この人などとあせっている次第である。

「うん？どうかしたかね？」

「その、なんというかですね」

ちなみに岬は楽しそうにこちらをみている。

「ああそうか、すまなかった
長の斉藤 恭介だ」

自己紹介がまだだったな、俺は寮

一拍間があって、

「ようこそ新入生」

斉藤先輩はそういった。

学生寮

『ありがとうございます』

岬と声をそろえていった　というより声が揃っていた。
ふむ、と行って微笑む斉藤先輩。

「では寮室へ案内しよう」

『ありがとうございます』

また声が揃った　お互いを見て苦笑、どうやら狙ってやってるわけではないようだ。

「行こうか」

ザツという音、斉藤先輩が歩き始めたらしい。
前をむいて俺も歩き始める。
歩きながら斉藤先輩が問うてきた。

「ところで君たちは付き合っているのかな？」

その問いに俺と岬は向き合ってまたも苦笑。

「ああいえ、幼馴染っていうやつですよ」

ふむ、と斉藤先輩はつぶやき、
「自分で聞いておいてなんだが、その手のことには疎くてな……勘違いをしてすまなかった。」

ただその、雰囲気というか行動というかだ、うまく言葉にできな

いんだが　それがとてもしつかりして見えてな」

「大丈夫です。決して不快ではなかったんですが、小学校のときからずつといわれてきましたから」

「そうね、むしろ私はうれしかったわ」

「どうしてお前は嘘でもさらつとそういうことを言えるんだよ」

「などといいつつ顔が真つ赤な神野森人でありました」

「本当だな」

顔だけこちらに向けて斉藤先輩。

「勘弁してください……」

ああ……隣をみれば岬がニコニコと笑っている。

俺をからかうのがそんなに楽しいのだろうか？

楽しいんだろうなあ……経験則から言っに。

「と、ここが玄関だ」

まるで学校の玄関だ。

違いといえばここでは番号で割り振られてることくらいか。

「おう、いらっしやい」

……赤髪の馬鹿がいた。

長いす膝を付き、パイプイスに腰掛けて玄関の先でこちらを見据えている。

先ほど顔はみてなかったけれども、赤髪で長髪のやつなんてそんなにいるわけが無い。

むしろ体格や高めの声など他の条件すべてがあてはまる。

「新入生の生徒は自分の名前をいつてくれよ？」

ああ、名前がかぶったときには漢字もきくからなー」

「じ、神野 守人です」

「霧島 岬です」

「んーと、おお！あつたあつた、特徴的な名前で分かりやすかつたわ。」

323号室と322号室なー、って隣同士かよ」

それは喜ばしいことだ、けれど、そんなことよりも聞きたいことが、

「あの、先ほど公道で激走し」

「だらっしゃあああああああああああああああああああ！」

赤髪発狂 頭に浮かんだのはその四文字。

長いすを押し倒しながらこちらに走りより、肩に手を載せ。

「頼む黙っててくれ、斉藤に殺される！」

小声で怒鳴るといふ高度な技を披露された。

軍人と一般人の境界線

「……激走、だと？」

斉藤先輩が眉をひそめてこちらを、否、赤髪を見つめている。

「き、聞き間違いじゃねえの？」

赤髪がだらだらと流しながらそう答えた。

後ろ姿しか見えていない斉藤先輩にもわかるんじゃないか、これは。

とはいえ俺のせいで発覚したみたいだし……普通に考えればあれが決していることではないことはわかるはずだ。

この場で尋ねてしまったのは俺の短慮だろう。

「あの先輩質問があるのですが、どうして男女なのに隣同士なのでしょうか？」

「……ふむ、救われたな結城ゆい 神野君に感謝するんだな」

若干の苦笑いをしつつ斉藤先輩。

結城先輩？がマジありがとう！とでもいいたげな瞳でこちらを見ている。

「質問に答える前にこちらの質問に答えてもらいたい」

「この学園の最たる就職先はどこだね？」

問われたその言葉、答えは簡単だ。

「……あ」

「軍ですね？」

そうその通りだ、軍なのである。

「その通りだ、軍、国軍、国営魔術師　呼び方はなんでもいいが……つまりはそういうことだ」

軍と答えた斉藤先輩の顔が一瞬歪んだのは気のせいだろうか。

「しかし、同時に研究所などに就職する学生もおおいはずですが」

少しの考慮の後岬はそう尋ねた。

「それも正しい、だからこそその折衷案なのだよ。」

そういった学生もいるためにせいぜいが寮が同じというだけだ。

さすがに軍のように男女混浴だったり同室だったりはいはしない」

「だから斉藤、分かりにくいんだよその説明は！

ああーあれだ、ようするに、だ。

軍人目指すようなやつは男だろうが女だろうがこれくらいは平然とすぐせるようになってのと。

学者めざすようなやつでも、本気でこの道をめざすんならこれくらいは我慢しろよってことだ」

「……なるほど、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「結城、俺の説明は分かりにくいのか？」

「だからいつも言ってるだろうが、かったくるしくて柔軟性がないんだよお前の説明は！」

お役人ですか？って尋ねたいくらいにはな」

「そう、か……努力はしているつもりなのだが」

そついう斉藤先輩は眉を下げて割とショックをつけているようだった。

「と、またせてすまなかった……寮室に案内しよう。

二人一緒に構わないかな？」

「ここが君たちの部屋だ、それと鍵はこれだ」

緑色の板に323と書かれた鍵を渡された。

ありがとうございますと岬と一緒に返すと、斉藤先輩はでは何かあったら下にいるので呼んでくれと行って下へと降りていった。

「じゃあ神くんまたあとで」

「ああ、またあとで　と待って、入学式に行くのに何時ごろに集まろうか？」

「……そうね、食事も考えて12時30分でどうかしら？」

最近ではほとんど時計の役割しか果たしていない携帯電話を開き、時刻を確認。

11時であった。

「OK、それじゃ今度こそまたあとで」

「ええ、またあとで」

鍵を差込み扉を開ける。

ズツズツと床をこすりながら扉は開いた。

「……なんというか、殺風景だな」

扉を開けるとそこにはダンボールが三箱無造作においてあり、これは実家から事前に送っておいたものだが部屋の中にはこれしか俺のものがない。

他には物干し竿が窓側にあり、デスクがあり、ベッドがあり、クローゼットがあった。

どれも色は白く個性というものがない。

6畳ほどの部屋のはずなのにずいぶんと広く感じる。

「って、んなことよりも荷解きしないとな」

さてまずは毛布やシーツとかの大きいものを優先しますかね。

「どう神くん進んだ？」

暫くすると岬が開け放たれていたドアの間から声をかけてきた。

「……んー、いくつか細かいものが残ってるけど大体はおわったかな」

答える俺、ふうと息を吐きダンボールの前で立ち上がりつつ時間確認。

12時15分だ。

「あれ少し早いな」

「ええ、でももう私荷解きおわっちゃったのよ」

「そっか……んーなら先に食事にしちゃいますかね」

いってダンボールの中を覗き込む。

さて、と。

「気にしないで作業を続けてくれていいのよ？」

「いや区切りもよかったし、どうも時間までに全部はおわりそうになかったからね」

「そう、ありがとう」

努めて岬の顔をみないようにながら俺はお目当てのものを手に取り、岬を訪ねる。

「こちらの乾パンでよろしいでしょうかお嬢様？」

入学式 この世界に、魔術に幻想はない

「……あれ？先輩たちも学校に行くんですか？」

玄関まで降り、靴を履いていると向かいで斉藤先輩と結城先輩が同じように下駄箱から靴を取り出していた。

「ああ、俺も出席することになっているからな と、神野君と霧島君だったね？」

よかつたら一緒にいかないか？」

「え、と」

いいつつ岬の方を確認、岬はこくりとうなずいて、

「喜んで ところでどうしてカバンをもっているんです？」

斉藤先輩がもっているのは学校指定の黒カバンである。

確か入学式に必要なものはなかったとおもっただけけど、やはり上級生だと違うのだろうか？

いや、結城先輩は何ももっていない。

「少し、もっていくものがあってな……」

そついう斉藤先輩の顔に浮かぶのは焦り？

その後ろで結城先輩はにやにやと笑っている。

「まあ今更あがいても仕方ないよなー、なあ生徒会長どの」

はっははは、と笑う結城先輩。

対照的に苦虫でも噛み潰したような斉藤先輩。

……はい？

「あの、斉藤先輩は寮長じゃなかったんですか？」

ふむ、といつつ苦笑しながらも斉藤先輩が言う。

「寮長と生徒会長を兼任している」

ではこれにてという言葉とじゃあなー後輩！という言葉をいただきつつ俺たちは分かれた。

当たり前のことだけれども先輩たちは新入生側にはこない。

それにしても驚いた、斉藤先輩が生徒会長だったことに。

いやそれ以上に驚いたのは結城先輩が副会長だったことか。（そう告げた結城先輩にあははーと冗談だとおもって笑ったら叩かれた）

「いきましょ、神くん」

岬の言葉に頷きつつ、体育館へと足を踏み入れる。

中を見ればパイプイスが規則正しく並んでおり、その大半がうまつている。

保護者と思われる方々もちらほらと見受けられる。

俺が一番後ろ、右側の席に二つ空きがあるのを見つけ顎でそたりをさした。

こくりと岬が頷き、俺たちはそこに座ることにした。

しばらくして入学式が始まった。
静まり返る会場。

「 第32期崎守学園入学式を開幕いたします 」

初老の男性が壇の上にあがり、マイクを通してそう宣言した。

式は滞りなく進み、学園長挨拶へと進んだ。

壇へとのぼる初老の男性。

皺や白髪が彼を初老だと証明しているのにもかかわらず、俺はそれが信じられなかった。

黒いスーツ越しにも分かる引き締められた筋肉、背筋は伸び、眼光はするどく、そして、

「 学園長の橘 功たけはなこうだ 」

肉声で体育館中に深く響く声 それが彼が初老であることを否定していた。

(まるでスーツを着た軍人だ……)

暫くの沈黙の後、学園長は新入生の皆さんと続けた。

「この世界に、魔術に幻想はない」

現実

「尋ねよう、魔術とは何に使われる？」

ではその君と橘学園長は最前列の生徒を指差した。

その男子生徒は緊張をはらんだ声でしかしはつきりと答えた。

「はい、日々の暮らしを支えるため　例えば土木や建築などに用いられます」

模範的な解答ではないものの正しい答えだと俺は思った。

けれどきつと間違っている、そういう教科書的なことを聞かれているのではないのだ。

「正しい、ああ正しいなその答えは。」

土木や建築などもそうだが、他にも医療や発電などにも魔術は携わっている。

故にその答えは正しい　間違っていたのは私の問いだ」

「この学園で習う魔術は、否、今現在のこの国において魔術は何に最も用いられている？」

どうかね？と橘学園長は先ほどの男子生徒に尋ねた。

短い沈黙、やがて男子生徒は答えた。

「……分かりません」

そうかと橘学園長は返し、では君は？と近くの生徒を指差し尋ねる。

その生徒も答えられない。

違う、答えないのだ。

橘学園長が何人に尋ねたのか分からなくなった時、ようやく指された一人の男子生徒が意を決したように答えた。

「っ、戦争です！」

聞こえたその答えに俺は思わず首を横に振っていた。

「おいしい……が、違う。」

ではその一番後ろの席にいる男子生徒、君はなんだと思う？」

学園長の指差すはこちら、加えて最後尾であり男子というと俺のことだろう。

一瞬、首を振っているのをみられたかと思っただけで、思考を取り消す。

そんなことを考えても仕方が無い。

ドン、ドンと心臓がやかましい音を立てる。

答えは分かっている、ただそれを声に出すのが恐ろしいだけだ。

ゴクリとつばを飲み、口を開く。

つまるところ、それが現実なのだ。

「人殺しです」

橘学園長はうなずいた。

人殺しである

「その通りだ！」
轟いた。

「魔術とは人殺しの道具である。
無論これが正しいとは思えないし、事実正しい使用方法ではない。
医療魔術をはじめとする人のために使われる魔術が正しいと言え
るだろう。」

だが新入生諸君 現実を見たまえ。
今現在魔術は人殺しの道具として使われている。
なるほど確かに魔術とは殺人においてもっとも有効な手段だろう。
意識しイメージしそれを顕現する…… たったそれだけだ」

話しを区切り学園長はパチンと指を鳴らした。

瞬間、魔術が発動した。

生み出されしは火球。

生成された拳大の炎が最前列の生徒を穿った 否その真横を。

「君は死んだ、分かるかね？」

私が数センチイメージを横にずらすだけで君は死んだのだ。

殺すという覚悟も！

殺されるといふ覚悟も！

何もかもがないままに君は死んだのだ、理解できているかね？

そして理解していたかね？

今君が立っている世界がそついう世界なのだと」

悲鳴、侮蔑　　そういつたこえが聞こえる。
俺からは見えないけれども、その生徒は失禁してしまったようだ。
無理もないだろう、と思う。

「……ふむ、では当たり前のことを確認しようか。

私たち大和は今武蔵と戦争をしている。

ああ、利権だとかそんなものはどうでもいい。

確認するのは戦争のことだ。

諸君に問おう、人殺しとは何かね？」

といった学園長は、しかし誰にも尋ねない。

「私は、いいかね？私は、だ。

私はこういつた人間のことを指すと思う。

軍人、政治家　　まあ彼らは当然だ、軍人は言わずもがな、そして政治家も人死にを計算して戦争をするのだからな。

そして君たちの中に軍人を、政治家を目指すものがいれば　　当

然己が人殺しになることを認めねばならない。

まあ、こんなことは本当に当たり前なことだ。

では次に話すのは当たり前なのに当たり前だと認められないことだ。

諸君らの中に医療魔術師や研究者を目指す人が当然いると思う、

本校でも毎年数多くの人材を世に送り出している。

ああ、だからこそ言おう。

君たちも人殺しであると自覚すべきだと」

例え話をしよう。

「君は医療魔術師だ。

君は死に掛けている自軍の魔術師を50人助けた。

その魔術師たちは嬉々として敵軍の魔術師を100人殺した。
では考えてみよう。

君が自軍の魔術師を助けなければ敵軍の魔術師は死ななかった。
つまりは死なないはずの人間を殺したのだ。

殺したのは自分ではないなどという言い訳は通用しない。
なるほど、君が救ったのが一般人だったならばそれはそうかもしれない。

だが、君が救ったのは軍人だ、軍人なのだ。

君がしたのは人殺しをするといっている人間を助けるということだ。

これは人殺しと呼ぶべき行為ではないかね？

ああ、数はすくないが中には純然たる医療機関に勤めるものもいる。

だが君らとて同じ事なのだ。

その救った人が人殺しをしないなどという保障はどこにもものだから」

もうひとつたとえ話をしてみよう。

「君は研究者だ。

君は効率のよい炎の魔術の展開式を編み出した。

これによって人々の暮らしは豊かなものになった。

だが考えてみよう。

それは同時に効率よく魔術が人を殺せるようになったということだ。

君がどれほど戦争とは関係のないと思えるような魔術を作り上げようが、それが本当に戦争に用いられないとは限らない」

だからこそ、という言葉がやけに脳に響いた。

「君たちは自覚すべきなのだ。
己が人殺しであることを。
何故ならばここは、」

「現在戦争中である大和と武蔵　その文字通りの境である境市なのだから」

「故に武蔵はここを攻めてくる可能性がある。
当然だ、彼らにとって私たちは人殺しなのだから！
故に私は言おう、新入生の皆さん」

万感の思いをこめて橘学園長は言う。

「自分が人殺しであることを自覚せよ。
故に自分が殺されうることを自覚せよ。
何故などと動転してはならない、なぜならば君たちは彼らにとつて人殺しであり、殺される理由はそれだけで十分なのだから。
だからこそ新入生の皆さん。
自分たちが人殺しであることを自覚し、いざというときに動転しなようになりなさい」

人殺しである（後書き）

あと少しで戦闘に入れそうです。

よつこそ崎守学園へ

「以上で私の話は終わりだ」

一礼し壇上より降りてくる橘学園長。

静まり返った体育館は、しかし拍手に埋め尽くされた。

考える。

僅かな時間で答えは出た、さきほどの言葉は正しい、と。さらに思考しようとする、が。

「生徒会長からの祝辞」

聞き覚えのある言葉に意識が戻された。

壇上にあるは斉藤先輩。

彼は静かに一礼し、

「新入生の皆さん」

一問。

「申し訳ないのですが、私には語れることがありません」

爆弾を投下した。

斉藤先輩は手に持った原稿を手に持ち、こちらにそれを見せた。

「ここに原稿はあります、ですが先ほどの学園長の話を聞き、私は思いました。

これは語るべきものではないと、きれいに取り繕った言葉をいう

べきではないと。

ですから私から皆さんに言う言葉は一つだけです」

「新入生の皆さん」

一問。

「ようこそ崎守学園へ」

静かに一礼し、斉藤先輩もまた壇上を降りていった。

斉藤先輩が壇を降りきったとき、パチ、パチとようやく音が聞こえ。

やがて大きな拍手になった。

式は順調に進み、そして入学式は閉式した。

よつごそ崎守学園へ（後書き）

z 言葉が思いつかずにものすごく短い文章になってしまいましたor

悪魔な幼馴染

っ、となんの音だか理解できないままそれを止めた。

無意識にに伸ばされた手は普段とは違い上へと伸ばされていた、そして理解する。

バイブレーションによって音をならしていたのは携帯電話、普段目覚ましは使わないけれども慣れない生活だからと念を押してかけておいて正解だったみたいだ。

時刻は6時いつも通りの気象時間だ、だというのに違和感。何故だと考えてすぐに思い至る。

「学生寮、か」

そつだ、俺は今そこにいる。

首を曲げて左手、いつもの場所を見る。

「……………」

そこに岬はいない。

「歯を磨いたりしますかね……………」

「つぶやいて起き上がる。」

鏡に自分の姿が映る。

映るは身長178センチの己が身体、視界に入らないように短く

まとめた髪、顔色に問題は無く 故に戦闘に支障は無いと判断。
ついで青のジャージで寝ていたなーなどとくだらないことを思い
出し確認する。

歯を磨いて顔を洗って幼馴染に登校のお誘いをしようか、と思いつつ冷たい水を顔に浴びせた。

扉をノックすると崎が扉を開け、俺の顔を見てからくすりつ、と笑ってから言った。

「おはよう、神くん」

「おはよう、岬」

「……なんだか変な感じね？」

「まあ、なあ……朝起きたら崎がいるのが日常だったもんな」

「私にとっては神君の寝顔をみるのが習慣だったけれどね？」

照れるな照れるな照れるな照れるな照れるな神野森人^{おれ}！

「いつまでも赤くなると思ったら大間違いだぞ、岬？」

よし、よしよくぞできた神野森人！

赤くなっていない、どもっていない、その上で面と向かっていったのだ！

「あら……そう、そうよね 少し残念だわ」

ついに幼馴染による恥辱からの脱出に成功したっ。

「ところで神くん？」

つ、としだれかかるといって岬。

「……………？」

ついつつま先で立ち、俺の顔に両手を添え、不安げな、あるいは何かを請うような表情で、

「あの、その…………おはよきのキス、してくれないの？」

結局、顔は真っ赤になりました。
反則だと思った。

級友 クラスメイト

1年1組そこが俺たち（崎も同じクラスである）の教室だ。北西棟の北校舎、その一階入り口から見て左手最奥に教室はあった。

「お好きなところにお座りくださいってことかな？」
「そうなんじゃないかしら？」

白い机 　ただし一人で座るようなものではないらしく、四人分の長さが続いている。

またイスは映画館のように引きおろして座るものようで、上がった状態がデフォルトラしい。

とはいえ、白に塗装された木製のイスである時点で座り心地は映画館とはくらべものにならないだろうけども。

「四席全部開いているところはないみたいね」

縦4列、横3列　40人のクラスメイトを収容するには十二分な席数だけれど、なるほど見渡してみても完全な空席はないようだ。席は半分ほどしかうまってないけれども　好き好んで知らない人の隣に座りたいような人ばかりじゃないってことか。と、入り口側最前列の席から活発な声が聞こえた。

「　　ってさつきからちゃんと聞いてんの？」

問うは赤髪ツインテール　赤の瞳がやや釣り目で、その、なんだ、座っているのにも関わらず、身長が低いということが分かる。たっても150ないんじゃないか、あれは。

問われた茶髪のショートのが、その女の子の方を向きもしないで頬杖をつきつつけだるげに答える。

もつとも、気だるげな表情だというのに猛禽をイメージさせるような雰囲気なだけれども。

「あア？つたく、ちゃんと聞いてるっての。

べつに顔みながらしゃべんなきゃいけねえっつールールはねえんだし、別にいいだろ？」

声色がなんだか特徴的だなー、語尾が高いといつかなんといつかなどと思いつつ同時にこの二人に対して好印象を持った。

自然体、こうであるのが当たり前なのだった雰囲気だ。

「ルールっていうより最低限のマナーで？」

「……あア？」

こちらに気づかれた、いやまあ入り口前からずっと見てればそりゃ気づかれるか。

ああいや、といいつつ崎と一緒に正面まで歩く。

「隣、いいか？」

「っハ、好きにすりゃあいいだろ？」

右隣の女の子の顔をうかがった後に茶髪の男が口の端をニイと吊り上げてそういった。

挑発的な口調ではあるもののそのつりあがった唇がおもしろえといつているように感じられる。

「それじゃ、お言葉に甘えて」
「失礼するわ」

男の左隣に俺が座り、さらにその隣に崎が座った。
左から順に、岬、俺、男、女の子。

頬杖をつきながらこちらを見、男が名乗った。

「みどうしゅうすけ御堂 修介だ。」

んでこつちのちっこいのがうえの ゆい上野 由井」

ちっこいと修介が指差したと同時に、ボディブローが由井から放たれた。

それを無視しつつ、修介が訪ねてくる。

「ンデ？そちらさんはなんていうんだ？」

「ああ、俺は神野 森人 それでこつちが、」

「霧島 岬よ、どうぞよろしく」

「神野に霧島な、よろしく頼むわ」

ところでな、と修介はいった。

「よくもまあここを選べたなお前ら？」

過激な自己紹介

「……えと？」

「こっつて何かあったっけ？」

「ああ、俺アどうみても好青年こうせいねんじゃねえだろ？」

「なるほど、ねえ……いやなんていうかだな……その、そんなことよりも自然すぎてさ」

「アア？自然？」

分かつてる自分が突拍子も無いことをいつていることは、だけれどどうにも口下手で説明がしにくいんだよな。

「そう、自然　うまくいえないんだけどさ、修介にとって由井ちゃん？と一緒にいるのが当たり前っていうかなんというか、そんな風に思えてさ。

あれだ、俺は隣にいる幼馴染の岬と同じ学園にくるのがあたりまえって感じで、ああくそやっぱりうまくいえないわ」

「アー、いやいい　言いたいことは分かった、んでだ、俺から言えることは一つだけだ。

「やっぱおもしれえなお前」

「そうか？」

おもしろいことなんてあっただろつか？

「お前自分が普通じゃねえって自覚ねえのな？」

「いやまあ……さすがに自覚はあるけどさ」

幼馴染と同じ学園に行くのが当然って思ってるあたり、異常だろ
うなあ。

「ハハっ、やっぱおもしろいわお前！」

言っつて、アアそつだと修介は言った。

「最初に言っておくがな、俺はお前らと違って幼馴染なんて上品な
ものじゃなくてだな」

頬杖を外し、修介は由井を指差した。

同じように由井は修介を指差し。

『腐れ縁』

だ、よ、と語尾以外はまったく同じタイミングで二人は言った。

修介や由井と話していると教卓側のドアがガラリと音を立てつつ
開いた。

注視していると現れたのは中肉中背のスーツを着た20台前半ほ
どの男性 教師だろう。

無造作ヘアというよりも文字通りどうでもいいので手入れがさ
れていないといった様子の髪型をしている癖に表情はするどく、否
雰囲気がか。

教壇にたつと背を伸ばしたまま彼は名乗った。

「お前らの担任の橘たちばな 信一しんいちだ。

さて、さっそくだがお前らには自己紹介をしてもらおうと思つ。
というわけで、だ」

橘 学園長の身内だろうかなどと考えていたので次の言葉に思
わず、は？などと上げてしまった。

「お前ら全員校庭に出る」

校庭にでるとそこには何も無い平地が横300メートル縦200
メートル続いている。

ここにくる必要はあるのか？などと考えつつ崎に尋ねるような視
線をおくると、崎は首を横に振った。

「あの、橘先生。何故校庭に出る必要があつたのですか？」

尋ねたのは見知らぬ男子生徒。

そう思っていたのは彼だけではないらしく、多数の生徒が賛同す
るようなそぶりを見せた。

「信一でいい、橘っていうのは紛らわしくてかなわない。

で、だ 質問に答える前に一つ、移動するまえに聞けカス」

「……は？」

「は？じゃねえ、なんでそういわれたかは自分で考えろ。」

さて、それじゃあ答えようと思うが、何、さっき言ったとおりだ」

「ここで戦うのが自己紹介だ」

天才 御堂 修介

その言葉に驚くよりも、むしろ後ろで聞こえた言葉に驚愕した。

最高じゃねえか、オイ。

今聞こえた声は修介、か？

特徴的な声だというのに断言できない、それほどまでに声色が愉
悦を表している。

後ろの声が続ける

「けどよ、信一さんよオ？」

俺アはつきりいって他人や校舎を巻きこまねえ自信がまるでねん
だよ」

ちょっと！と本気であわてたように聞こえる由井の声。

あの馬鹿 わざと先生相手にさんと強調して挑発しやがったな

！？

だが、信一先生はくくつと笑い、

「なるほど、お前が御堂 修介か。

ふむ、構わんよ？ 好きに巻き込めばいい。

何、たかだか学生の魔術くらい俺が受け止めてやるっ」

「はははっ、おもしろい冗談だな信一さんよオ。

俺の名前を知ってて言うってことは、何か、俺が実技試験の成績
が歴代二位だって知った上でんなこといつてんだな？」

……歴代、二位？

崎守学園は創立32年目である。

学生のなかだけとはいえ、実技だけの評価とはいえ、32年の中で歴代二位、だと？

思わず笑いそうになった　こんな良い偶然てあもあるのかと。

天才が目の前にいる。

「勿論だとも……と、何か勘違いをしているようだから教えてあげよう。」

君は歴代二位ではなく三位だ」

「アア？」

「まあ私にとってそんなことはどうでもいいんだがな。」

「ふむ、では歴代三位君　全力で私に向かって魔術をうちたまえ」

「……ハ、ハハッ」

御堂　修介は笑う、嗤う、嗤う。

嗤いながら前へと歩み出て俺を抜き去る。

「ハハハハッ！アア、アアアア！おもしろえ、おもしろえぞオイ！？」

ああ、ここに来てよかった　今まで化け物扱いされててよ、んなこといわれたのは初めてなんだわ。

だからお言葉に甘えて　文字通り全力でいくぞ？」

きたまえ、と声が聞こえた。

魔術とはイメージし、魔力を周囲からかき集め、詠唱で具現化するものである。

ハッ、と嗤う声。

瞬間、世界が変わった。

枯渴したのだ半径10メートルほどの魔力が。

ありえないという言葉が聞こえた、一つではない、複数、いたるところでだ。

魔術を唱えれば周囲の魔力は減る　だが枯渴などという現象は、10人ほどの魔術師が同時に魔術を唱えでもしない限りは起こりえない現象である。

この段階でだれもが理解しただろう　御堂　修介が天才であると。

「我熾すは灼熱、地獄、即ち我が敵を滅するもの」

也、と詠唱は締められた。

御堂修介の掲げられた右手、そこに顕現せしは業火　それは球状で、赤黒く燃え盛る炎で、連想したそれは5メートル台に縮められた太陽だ。

「アア、クソ……今更聞くのはだせえってことは分かってるけどよ

才。

本当に受け止められるんだな、生憎と直前で止めるなんて器用な真似はできねえぞ？」

「それは良い事だ……受け止めてやったのに、直前で止めてやったんだ！などといわれては敵わないからな。

ああ、それと一つ聞きたい事があるんだが、」

そんなものでかまわないのかね？と嘲るように信一先生は言った。

「ハハはハハハッ！……、いくぞ」

「 穿て」

詠唱は一つ、太陽が撃ちだされた。

双方の距離は20メートルほど、一瞬 瞬く間にその距離は埋められ0になるだろう。

その一瞬で信一先生は魔術を発動させるところに至ったのだろう、周囲から魔力が引き出された 極少量が。

「 断絶する」

詠唱は一つ、起こりえたのは何かを断ち切ったという事象のみ。

それは決して太陽ではなく 思考する間に太陽が信一先生へと直撃。

「な、に？」

しなかった。

直撃する直前 何事もなかったかのように太陽が消失した。

「物理干渉のない炎で何をしようとしていたのかね？」

なるほど、確かにそれは強力な炎だったとも それは認めよう。
ああだが君は何か勘違いしてないかね？

マツチ一本分の火が付かないようにするのと、その炎が付かないようにするのに差があるとでも？

無い、違いは無いのだよ。

なぜならば酸素が無ければ火は燃えないのだから ついでに
うのならば空気を介さなければ熱も伝わらない。

ならば空気を断ち切り、分かち、人工的に真空をつくれればいいだ
けだろう？」

苦笑をしたい、何をどうすれば一言の詠唱でそんなことができる
かが分からないからだ。

り。
ハ、ハハと修介の笑い声が聞こえ、そしてぴたりとそれがとま

「……なるほど、理解しました信一先生」

御堂^{生徒} 修介は橘^{教師} 信一にそういった。

天才 御堂 修介（後書き）

あれ主人公のバトルに入れなかった？

おかしい、余裕で入れる感じだったんです。

というよりこのバトルが予定より伸びすぎましたorz

というかバトルもなんだか失敗した感じで……多分そのうち書き直すと思います。

深夜のテンションって怖いですね。

手加減は必要そうか？

修介に向かって肩をすくめて笑った後、信一先生はこちらを、生徒を見回し、ほんの少し考慮するそぶりを見せてから尋ねた。

「御堂 修介の自己紹介はこれで終わりにしようと思うが、異論はないかね？」

その言葉に空気が弛緩した。あたかもこれであの化け物と戦わずにすんだとでもいいだけに。

異論は出ない。故に好都合、そう考えた。
手を拳げる。

「俺は彼と自己紹介をしたいんですが」

「……ほう？」

「神くんっ」

岬を手で制す、下手をすると命がけになることは十二分に承知している。

「オイオイ神野今の見てたのか？」

いかにも簡単ですって感じに防がれたけどよオ。　　ありゃとんでもない技巧だぜ？」

「分かってる、少なくとも俺にはあんなことは出来ない」

もとより、俺に使える魔術はただ一種類。

「……分かってる、ねえ。」

なあおい神野、テメエは強いのか？」

「分からない、だから戦いたいんだ」

「……ハハツ、分からないってなんだ。

やっぱテメエおもしれえぞ神野。

信一先生、自己紹介をさせてもらって構いませんか？」

信一先生は唇の端を吊り上げたまま答えた。

「構わんよ」

「ちよつと修介！アンタ分かってんでしょうね！？」

アア？と後ろを振り向いた修介は由井の姿を見つけ、言う。

「わーってるわーってるってのオ、コロさねえようにちゃんと手加減はするっての」

侮られている、そのことに不快感はなかった。

それを訂正させればいいのだから。

さて、と修介はいい。

振り返りなおして、校庭の真ん中を指差した。

「とりあえずここじゃせめえ、あそこまでいこうぜ？」

確かにその通りだと思い、頷いた。

向かい合って対立する、彼我の距離は20メートル。

「さてはて……まあ、なんだ？」

由井にああいった手前、死なない程度には手加減してやるよ」

その言葉を黙殺し、告げる。

「……戦う前に一つだけ、俺は基本的に普通の魔術は使えない。戦闘に耐えうるレベルで扱えるのは肉体に関する魔術だけだ」

言つと、怪訝そうに修介。

「アア？ 戦う前から自分の手札をさらす馬鹿がどこにいる？」

「だからいつたる？自分が強いのが分からないって。」

不意打ちで倒せてもなんの意味もないんだよ」

「ハッ、いうじゃねえかオイ？」

「じゃあ……いくぜ？」

修介の周りの魔力が吸い寄せられていく。

つまり、戦闘開始、だつ。

「 氷よ、在れ」

詠唱、生み出されたのは5メートルほどの氷のツララが三つ。

常人ならそれを生み出すのにどれだけの時間がかかるか、想像し、おおよそ30秒だろうと見切りをつける。

だが目の前の修介は一瞬でそれを展開した 間違いなく天才だ。それにこれは、否これだけのものでありながらこれはまだ小手調べだ。

「 穿て」

高速で放たれるつらら、瞬く間にそれは俺に到達するだろう。

これを相手の想像を上回り凌駕しなければならない。

何故ならば、

「 肉体強化を開始する」

詠唱 イメージなんてものは必要ない、俺はこれだけを鍛えてきたのだから。

変わる、世界が。

遅く、遅く、目に見えるすべてのものが遅くなっていく、だが俺の体感速度は変わらない。

スローモーションで流れる世界、その中でもつららは速い。距離が10メートルになり、8、6、4、2。

構える 左拳を前に、右手を腰脇に。

「 砕っ！」

左拳を打ち出す 速度はつららを凌駕し、凄まじいまでの破砕音。

砕いた、撃ちだされたつららのうち一つ。

手には痺れにまでいたる反動が返ってきている、だが、

「しっ！」

止まらない 否止まらない。

左拳を高速で引き戻し、一撃、破碎、二撃、破碎。

撃ちだされたつらは三つ、そのことごとくを破碎した。

手には衝撃による痺れ、そして皮膚の裂け目から流れるは血。

それらを戦闘続行に支障はないと判断し、こちらを見据える修介を見据え返し、問う。

「手加減は必要か？」

何故ならば、何故ならば、だ。

神野^俺 森人が守るべきは霧島^{幼馴染} 岬。

天才と枠組みにも収まりきらない彼女を守るうというのだ。

本気の天才程度 真つ向から勝てずにどうする？

ハッと笑い、修介は答える。

「……テメエ何がわからねえだ、十二分に強いじゃねえかよ。

ああ、手加減？

当然全力でいくにきまつてんだろっが!？」

ここから先は本気でいくと言い、修介は続ける。

「1年1組32番 御堂 修介」

「1年1組12番 神野 森人」

いくぞ、という声が重なった。

手加減は必要そうか？（後書き）

半月で1万PV……正直予想以上です。

天才と異端

距離を詰める！

静から動、構えを引き寄せて姿勢を前のめりにかえ一気に加速する。

こちらの武器は肉体のみ、故に接近戦にしか活路はないつ。

「ハッ、アメエ！ 術式再演！」

現れる氷のつらら、数は3。

先ほどの魔術、だと？

「同じ魔術が通用すると思うなっ！」

叫び、だが修介の唇が釣りあがり、

「再度繰り返す」

さらに出現したつらら だと!？

新たに3、合わせて6かつ。

打ち碎けるかと思考する 瞬断、4つか5つが限界だ。

残ったつららが無防備な身体に直撃し、致命傷を受けるのは確実だ。

「はっ」

呼吸を吐き出し、訓練を思い出す。

俺の霧島流近接格闘術の真髄武術　それは、判断だ。
判断をするのだ、避けるか、打ち砕くか、あるいは……

「全弾を同時射出、穿て」

打ち出された6つのつらら。

射出地点と方向から判断する　狙いは胴体4と両手、かつ。

ならばと右へステップを踏み身を翻す。

4つの攻撃はよけたものと判断し、だが残るは2。

崩れた姿勢で打ち砕けるものではなく。

「おおっ！」

故に捌く。

胴に向かつて飛来するつららを右手の甲で払い、左脇腹へ飛来したつららを左の掌底で押しつける！

一瞬の静止、だが止まってはられない、前へ前へだ！

再度の加速。

距離がつまり残りは10。

修介の表情に浮かぶのは賞賛　だが同時にこれならどうよと瞳が告げている。

「炎よ、在れ！」

浮かぶは1メートルほどの球体の火球　あの太陽の劣化か！

「穿て穿て穿てエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

はや、いー！

今度は速度を優先した魔術かつ。
体感速度はさきほどのつららの倍　避けられない、炎である以上は打ち砕けもしない！

「おっ、」

左足で大地を強く踏みしめ加速する。

両手を顔の前で交差し、さらに加速。

避けれない、撃墜できない、捌けない。

ならば最小限のダメージでそれ受けきる。

炎に最速で自ら突っ込み。

(ぎっ、)

抱いた悲鳴はそこまで続きは気合で押し込める。

焼ける焼ける妬けていく、腕はただれ制服は燃え始め、だが、

冷たい空気

交差した両手を解く　目の前に修介がいる。

構える　同時に殺ったと核心し、

「ア、アア！　大地よ！」

魔力の集中、悪あがきだと予想し　驚愕した。

魔力の集中した場所が俺だけでなく修介も含んでいるだど！？

驚愕は一瞬、俺と修介の中間に土の柱が生まれ、それが俺の突進を止め、同時に修介を後ろに吹き飛ばした。

「づづづ、ア、アアアアアアアアア！」

こちらを見据え、衝撃で口から血を吐き出しながらも天才がほえた。

そうして気づく、驚きに飲まれて足を止めていたことに。踏み出そうと地を蹴り、声が聞こえた。

死んでも恨むなよ

瞬間、魔力が枯渴した。

「我熾すは灼熱、地獄、即ち我が敵を滅するもの也」

生み出されたものは太陽。

理解した、不可避であり、捌けるものでもない。突出してダメージを減らそうが死に至るだろう。

ならば、ならば、ならば、ならば、ならば、思考する、そして答えを導き出す。

「我望むはことを成す身体、払いし対価は己が未来也」

イメージして告げる 周辺の魔力を吸い上げる、否、吸い上げ続ける！

身体に魔力を通し、左手を突き出し、大地を踏みしめる。

とりあえず15段階になれば、無理とはいわないだろうし言わせない

太陽を見据えつつ、言葉を思い出す。

思うことは二つ、一つ目、現状を鑑みて思う、至れなかったのだと。

二つ目、未来を鑑みて思う、至るのだと。

なるほど、現在おれは修介天才に劣り、この状況に至る。

「……いくぞ、神野」

「……来い」

だが、俺はあれだけで15段階に至れると、そう思っていたか？
否だ。

冷静に判断する、修介が15ならば俺は13か14だろう。
前情報、戦闘経験がすくないしいしは皆無であろう俺のスタイル。
それを差し引けばそんなものだろう。

「 穿て」

撃ち出される太陽。

見据え、思う。

これを凌駕すればいいのか？と。

俺に許されたのは限られた種類の魔術、故にたった一つだけを鍛えた。

打ち出された太陽は速かった。速度において先ほどの火球と同程度であるう。

つまりはこれこそが真正銘修介天才の全力だ。

一瞬、一瞬だけだ。

それだけでいい。

万物に死をつげるであろう太陽が迫る。

「おっ……」

息を吐き出す。

「おおっ！」

つむぐは気合。

踏み込むは左足。

太陽を見据え、咆哮！

「おおおおおおおおおおおおおおお！」

左、打ち出した一撃は神速。さきほどまでのいかなる攻撃をも凌駕し、太陽へと迫る。

魔力をこめられ打たれた拳は炎をも殴りつけ。瞬間体感する世界が止まった。

気合をのせる。

大地を踏みしめ腰を落とし、己が体重と魔力をすべて乗せ右拳を打ち出す。

この瞬間、俺神野森人は天才御堂修介を確かに凌駕した

天才と異端（後書き）

戦闘にスピーディーさが無さ過ぎるorz

感想、アドバイスをお待ちしています。

なお投稿して5分ほどは誤字脱字を必死にさがしていたりしますo

orz

それがおわってから読んだ方がいいかもしれません。

また誤字脱字報告もお待ちしています。

決着

霧散し、体感時間が戻っていく。

現状を把握する

左腕を振り払い、燃えていた炎を消し去る。

左手はもはや使い物にならないほどのダメージを受けている。
己の周りに残存する魔力も希薄。

だが、俺の勝ちだ　　そう断言できる。

「……降参、してくれ」

なぜならば修介の周りの魔力は枯渇しているからだ。
移動するか暫しの時をまたなければ魔術は使えない。

そして俺は移動する時間も回復するだけの時間のどちらとも与える
気は無い。

「ハッ、拒否する　　そんなしまらねえ決着は嫌だね」

ゲホッ、と口から血を吐き出しながらも修介は笑って続ける。

「アア、クソ……魔力がねえ……ハハハッ、なら最後はテメエの土
俵でやってやらア」

少しずつ、修介の周りに魔力が集まっていく。

掻き集めている、のか？

収束させる魔力を広範囲ではなく遠距離のみから　　俺にはで

きそうにもない。

その上で僅かな魔力では俺を倒せないと見切りをつけ接近戦、いい判断だ。

拳を構える　まだ終わっていないと。

「　身体活性化」

「　肉体強化を開始する」

後を追う形で詠唱、ここにお互いの手札は出尽くした。

周囲の魔力は完全に枯渇し、お互いが移動しなければ魔術は使い得ない。

判断する　当方は技量と強化魔術の完成度においてあちらを圧倒している。

だが、左手は使い物にならず、打てたとしても力の無い打撃が
精精。

結論　問題はない。

「来いよ、神野」

「……行く、」

ぞ、という言葉置き去りにして加速した。

踏み込む、瞬く間に距離は0となる。

突き出される左拳　遅い、掻い潜る。

交差する　こちらは右拳を極限まで引いた状態で。

狙いは側頭部。

修介の視線　一撃はもらってやるという覚悟。

「甘い」

一撃で終わるとおもっているのか？

思考と同時拳を打ち出す。

狙い違わず側頭部を打ち抜く　硬い、流石だと思った。

轟音。

グラリと修介の身体が揺れ、だがそれだけだというように口を開き、

「　ハッ、耐え」

言い切れずさらによろめいた。

「な、に」

「だから甘いと言った！」

揺らしたのだ脳を。

これにより止まる時間は1秒程度　間髪いれずに鳩尾、心臓を穿つ。

止まれ

呼吸を奪い、血を止めた　既に修介は死に体であるはずだ。

だがそれでも倒れない、こちらを力強い瞳で見据えている。

意志の力だろう。

ではどうするか。

思い浮かぶは一つの技。

「打とう、打つべきだ。」

判断は一瞬　いくぞ。

「霧島流近接格闘術」

左手を前に、腰を落とし、右手を極限まで引き戻し、放つ！
胸部へと衝掌を打ち込み、衝撃を皮膚ではなくその内へ　！

「崩衝！」
ほうしゅう

全衝撃を修介の内部へと叩き込んだ。

内部破壊である。

先生曰く、これを受けてたっぺいられる人間はいない。

「ガッ……」

そして修介がゆっくりと崩れ落ち、こちらの肩へとしなだれかかった。

決着（後書き）

こういった感じの物語を書くのは初めてなので感想アドバイスをお待ちしています。

無茶しすぎだ馬鹿ども(前書き)

忙しいためさらに短めの更新となりますorz

無茶すぎだ馬鹿ども

「……………あー」

気絶した修介を支えながら思うことは一つ。

……………やばい、俺も倒れそうだ。

アドレナリンが収まったのか、手の痛み襲ってきた。

痛みを訴える以外でわずかに残った感覚が、流血していることをしらせていた。

「つと、あぶない」

体で支えていた修介が横に倒れそうになり、あわててそれをこちらの体で止める。

一度しか防御に使っていない右腕だつてぼろぼろなのである。

俺も修介もこれは医療魔術をうけるべきだろう。

しかし、まあ……………なんというかお互いやりすぎたよな。

俺は天才に勝ちたかったし、修介は戦える相手がいて楽しかったんだらうか？

あれだけ才能があれば相手になるやつがすくないだらうしなあ。

いや、まあだからといって命の取り合いになるレベルの勝負になったのはあれだけだ。

次からはお互い自重し

「無茶すぎだ馬鹿ども」

「　　つう」

頭部に激痛。

首だけ振り返れば信一先生がいて、呆れた様子でこちらを見ていた。

「良い経験になるだろうと思って許可を出してみればこれが貴様ら
は？」

あれか、私は殺人鬼ですと……そう自己紹介したかったというこ
とか？」

「……その、申し訳ありません」

ふむ、と行って信一先生は楽しげに唇を吊り上げた。

「まあ、正直に言えば構わんのだがな」

……はい？

「　　風よあり続ける」

見えない何かを持ち上げられるように修介の身体が浮いた。

「神野、だったか？お前はあるけるのだろうか？」

「ええ、はい……すいませんが構わない、とは？」

顎で校舎を指し、信一先生は歩きはじめた。
追いつがるように歩き始める。

「何、瞬間的に負けるとおもっていたからな。」

それだけこいつのスペックは規格外だった。
だからこういうやつもいるのだと他のやつらに示そうとそう思っ
ていた。

もつとも、最初は霧島岬と模擬戦をさせるつもりだったが。
まあ結果論としてはいいものだったのでよしとすべきだ。
なぜなら……例え才能で負けていても勝てるのだと最初に証明で
きたのだから」

「他のやつらへのいい指針になるだろうな、才能だけがすべてでは
ないのだと」

「……あの、やっぱり俺才能で負けてました？」

いやまあ分かりきってる事だけれども。
今回はほとんど俺の土俵で戦ったっていうのにこの辛勝なものな。

「才能で勝てる要素があるとでも？」

最後の攻撃だって、武術の一つだろうしな。

ああいや、途中で加速した際の魔術 あれは別だな」

！

ありえないと心の中でオレがつぶやいた。

「……そんな顔をするな、仮にも教師だ。

別段魔術の中身を聞いたりはせんよ。

むしろアドバイスをしてやろう、戦慣れしている人間ならアレが
異端だと気づくぞ」

ま、私には関係ないからどうでもいいがなと言い。

「とはいえ、だ　流石に次からは自重して戦ってくれ。
生徒同士で殺し合いになると私の責任問題になるからな」

思考がとまっていたみたいだ、苦笑し言葉を搜して告げる。

「……それは修介にいつてくください、なんだかんだいつて命がけだ
つたのおれだけですよ？」

「違ういな」

間章 霧島岬は……（前書き）

三人称です、例に漏れず短いですorz

間章 霧島岬は……

「……どう、して」

霧島岬はつぶやいた。

さきほど信一と共に保健室へと向かった神野を、その表情をみて暫く何もいえなくなったあとに出た言葉がそれだった。

神野は少しだけ誇らしげに笑っていたのだ。

ぼろぼろになりながら、もしかすると死んでいたのかもしれないのに。

「どうしてよ、神くん」

そうもう一度繰り返した岬は、しかし答えを知っていた。

何故神野森人が戦うのかを知っていた。

何故神野森人は霧島岬を守るのかを知っていた。

そもそも神野森人がどういう存在なのかを知っていた。

だから、だから霧島岬は……

「……たい」

「……え、岬、ちゃん？」

腐れ縁の男の子を心配していた少女 由井は場にそぐわない言葉
を聞いた。

ざわざわと周りがさきほどのことを話していて、だから聞き間違
いかとおもいつつも、不安になって尋ねたのだ。

だがそこには無表情な岬がいて、

「どうしたの？」

と首を傾げつつ尋ねられ、ああ、やっぱり聞き間違いだったのねと由井は思った。

「あはは、うん、いやなんでもないので？
多分聞き間違えね！」

あははー、嫌ね私ったら、あんな馬鹿が怪我したくらいで動揺しちゃったみたい」

たいだなんて聞き間違いよね、と由井は結論づけた　だ
が先ほど確かに岬はそうだったのだ。

死にたい、と。

死んでもいいのなら死んでしまいたいとそう岬は思ったのだ。

ああ、と岬は続けて思う。

本来神野森人に戦う理由はない。
自分に守ってもらう価値はない。

何より霧島岬は神野森人を殺し続けているも同然なのだ。

だから霧島岬は死にたかった。

死ねばすくなくともこれ以上神野森人を殺さずにすむ。
けれど死ねない　否、死んではいけない。

何故ならば、霧島岬は、

誰も勝てないような化け物にならないからだ

だから、がんばろうと岬は思った。
がんばってはやく化け物になるぞと。

間章 霧島岬は……（後書き）

複線を（これはモロすぎますが）いつ回収するかで悩んでいます

間章 霧島岬の戦い

自己紹介は順調に進み、最後の二人となった。

その二人は岬と由井である。

由井は修介が心配だったため保健室にいったためで、また岬もそれに付き添ったため最後となったためである。

もっとも岬の場合はそれ以上の理由があるのだが。

ここに神野と修介、それに何人かの生徒はいない 保健室でやすんでいるままだ。

「出席番号8霧島 崎です、よろしくお願ひします」

「1年1組2番上野 由井よ、よろしくね」

名乗り、頭を下げる。

校庭の中心で二人は相対し、その距離は20メートル。

「いくわっ、よー！」

宣言し、由井はイメージを顕現させた。

「 生み出すは水、圧縮、そして撃ち出す！」

2秒ほどの時間をかけて作り出された10リットルほどの水が、瞬時に拳大に圧縮され、撃ち出された。

(優秀、ね)

それを見て岬はそう判断した、普通ならあと1秒はかかるだろう魔術。

それだけで由井が優秀だということは判断できた。効率の良い魔術を少しでも早く撃ち出すというのはとても正しい。だが、時には効率よりも威力を重視しなければならぬ時がある。例えば神野を倒そうとすれば一定以上の威力の魔術をあてるしかない。威力の弱い魔術では破碎されておわるだろう。

例えば修介を倒そうとすれば彼の魔術障壁を突破したうえで、倒しうる威力をもつ魔術をあてるしかない。この場合も同じである。

「……………」

自らに向かつて撃ち出されたそれ、高速で接近する水弾を見て岬は何もしなかった。

「……………え？」

着弾、消滅。

否、着弾できずに直前で消滅。

魔術障壁というものがある、これは術者の意志によって発動できる固定魔術であり、効果は分かりやすいもので、魔術をもって生み出された攻撃を己が体内魔力を放出することによって減衰するというものである。

つまりは、由井の攻撃はそれに阻まれたのだ。

「……………ウン？」

あり得ないでしょ、と由井の唇が動いた。

魔術障壁とはいわゆる防御を突破された際の保険的なもので、あくまでも減衰するという効果のものである。

それで自分の魔術が消滅させられたのだ　　あり得ないでしょともう一度由井は繰り返した。

由井は修介と模擬戦闘を何度かしたことがある、勿論それは手加減をされたうえで、尚且つ全敗だったのだけれど……魔術が消滅させられるなんていうことはなかった。

そう、修介という規格外の才能をもった人間でもなかったのだ。今つった魔術とて、減衰され遅くなり水弾は小さくなるだろうが、それでもあたるはずなのだ。

だが、現に今無効化された。つまるところそれは一定以下の攻撃はいくら放とうが無効化されるということだ。

「今から攻撃するけれど、防御できないようなら降参して頂戴」

宣言　瞬間由井に冷え切った何かがはしった。

悪寒などと言つなまやさしいものではない。

予感　自分が死ぬのだという絶対的な予感。

「　魔力よ、在れ」

集まる／集っていく／集合する／呼び寄せられる／固まっていく／圧縮されていく

校舎一つ分　　周囲200メートルほどの魔力がすべてそこに集った。

「……あ、あ」

由井は呻いた、歪んでいるのだ視界が。
魔術を扱ったためのもので、不可視のはずである魔力によって。
岬が口を開いた、歪んだ視界の中でそれが見えた気がした。
否、口を開いていた。

断言できる、何故ならば既に歪みはなくなりはっきりと見えたらだ。

魔力の枯渇が起きた。

詠唱

「 風よ在れ、そよ風を起こし、つむじ風を起こし、暴風を起こし、そこに在れ」

由井の思考はここで停止した。
理解できなかったのだ目の前のそれを。

風が在った 岬の周りを覆いつくし、吹き続ける風が。
それはまわりに被害がでないように制御されていた 風が一定の範囲から出ないようにと。

ここで繰り返す、吹いているのは風である。

それが地面を抉り粉微塵に砕きながら範囲外へと砂塵を撒き散らしていた

それは見たものにとって魔術ではなく、災害だった。

「……どうにかできそうかしら？」

尋ねる岬にこの大魔術とでもいうべきものを成しえた誇らしさというものはまるで見えなかった。

できて当然のことをしたのだというかのように。

尋ねられた由井は、しかし答えることができなかった 目の前の光景に吞まれていたからだ。

だから、答えたのは別の人物である。

「……降参、する これを防いで生徒や校舎の被害をなくすなど出きる気がしないからだ」

教師が、信一がそう答えた。

こくりとそれに頷いた崎はパチンと指を鳴らし暴風を消した。ケホツ、と咳を鳴らした岬は思う。

まだ足りないのでしょうかね、と。

間章 霧島岬の戦い（後書き）

間章は終了です 多分。

崎の実力がお伝えできたのかなーと。

主人公より能力面においてヒロインのほづが圧倒的に高いというのはどうなんだろうなーと思いつつ。

Prologue End 考える

俺は考えていた。

清潔な保健室のベッドの中、カーテンで区切られたそこで天井を見上げて。

先ほど保険室にきた岬の言葉、そしてそれに対する答え。

神くん、私なんかのためにがんばらなくていいのよ？

岬はこういふ言い方嫌いなんだろうけど、俺はさ、俺は、さ。

そういふ存在なんだよ。

そう言った俺の発言　それが果たして本当なのかと考える。

正しいか正しくないかなんてものはどうでもいい。

本当なのか？

俺の存在、たった一つの目的のため。

理解している、吐き気がするほど理解している。

どうにかしたい、けれど俺にはどうにも出来ない。

理解している、泣きたいほどに理解している。

あるいは自分が死ねば岬を救えるかもしれない　そう考えた、

けれどそれは無理で。

だけど、同時に。

俺が岬を守る戦いの最中に死んでしまうことが岬にとって最も救いのある終わりなのではないかと、そう思う。

だから本当なのか？と思う。

何故ならば、

自分を、どこか校舎を囲んでいた魔力が消えた。

岬がやったのだろう、そう思う。

むしろ岬以外の誰かができる行為だとは思えない。

岬の体を案じると同時、もう一度思う。

何故ならば、霧島岬はだれよりも才能があり、俺が戦うよりも明らかにならなまでに勝率があるからだ。

守るなどとおこがましい。

ただの魔術師でしかない神野森人はむしろ守ってもらうもの立場だ。

何故ならば神野森人こそが霧島岬の弱点なのだから。

だからこそ、俺は自分を守るだけの力をつければいい。

霧島岬のかわりに戦うなどということは自殺行為だ。

分かっている、分かっている上でこう思うのだ。

霧島岬を守りたいと。

間違っている、こんなにも間違っている行動をとっているのにとどろいて俺がそんな存在だと言えるのだろうか。

本当なのか？

俺は本当に、

を にして が ために守る存在なのか？

思考してはいけないことを考えて穴だらけになっても考えた。
分からない、分からなかった。

両手を見る、治療魔術をかけてもらい、回復が促進されていると
はいえ爛れたままだ。
痛い、本当に痛い。
けれど、それで分かった事がある。

どんなに痛かろうと辛かろうと、岬が苦しむよりはいいな。
それだけだ。
それだけで、ああ、とつぶやけた。

自分がどんな存在だろうと関係ない、目的も関係ない、正しいか
どうかも関係ない。

どんなに痛かろうと辛かろうと、岬が苦しむよりはいいのだ。

それだけだ、それだけなんだ そう自分に言い聞かせるように
思考して、そういえばと思った。

授業は終了かな、と。
何故ならば、あたり一帯の魔力を岬が使い切っただろうからだ。
だからこそ彼女は時間ぎりぎりまでにここにいたんだろうなあ。

……少し、疲れた。

自覚すると同時、眠気がおそってくる。それに身を委ねて眠りに落ちる直前、俺は最後にこう思った。

どうして俺が魔法使いじゃないのか、と。

Prologue End 考える(後書き)

タグに入れておいた魔法という言葉をようやく使えました。
神野と岬の間関係の複線は今出すつもりのは大体出し終えま
した。

想像できているかたもいるのかなーなどとおもいつつ感想をお待ち
しております。

2万PV突破しました、ありがとうございます。

宅したら、驚くべきことに向かいの部屋だったという訳で。
ちなみに由井のほうは修介の隣のようだ。
と気が付けば岬と由井が洗面所の入り口にいて。

「あら、ひよふあよう神くん」

「神野ーひよふあよう」

「……聞いてた、のか？」

『なんのことかしら？』

息をそろえていう二人。

神様お願いですから俺を弄る人を増やさないでください！
腹黒幼馴染だけで割と精一杯なんです俺のガラスのハートは！

「朝の挨拶は大切よ神くん？」

「そうね神野、朝の挨拶は大切よね？」

神は死んだ、そんな言葉が聞こえた気がした。

「……あ、ああ、おはよう岬、由井」

「朝の挨拶は大切よ神くん？」

「そうね神野、朝の挨拶は大切よね？」

「……、……つまり、そういうことですか？」

「おはよう！岬！唯！ 今日もきれいだね！」

満面の笑みを浮かべ、サムズアップ！

正攻法でだめなら奇策で話しを

「朝の挨拶は大切よ神くん？ あとそれ気持ち悪いわ」

「そうね神野、朝の挨拶は大切よね？ その表情はキモい」

……、……心が滝のような涙を流しています。

ええ、そらせるなんて本気でおもってはいませんでしたとも。

「……ひよふあよう、岬、由井」

ん、とって笑う二人。

だがその瞳はさらにどうやってからかおつかとでもいうようなもので、

本当勘弁してください。

「……アー、つたく、おはよう霧島、由井」

呆れた顔で救いの手を差し伸べてくれたのは修介だった。

肩をすくめて修介に挨拶し、それぞれ洗面所にむかっていった。

「……助かった、修介」

本当、助かった　　出きれば由井に言い含めておいてくれるとも
っと助かるけども。

うん、岬は諦めるしかないけども。

1章 戦争の中の世界（後書き）

日常パートが暫く続きます。

タイトルと著しく内容が違うのは章自体のタイトルということ。それと小説のタイトルを少しだけ変更しました。

予告です近いうちにプロローグの内容を数ページにまとめます。

と思ったのですが、削除は出来ないんですねorz

編集して余った分を削除すればいいかなとおもっていたのが甘かったですorz

登校 クラス (前書き)

今回より少しなぐくなりますがかわりに更新頻度が落ちますorz

登校 クラス

「神くん、準備できた？」

コンコンと扉をノックして尋ねる岬に俺はああ出来たよと返して扉を開く。

目の前には岬がいて、修介がいて、由井がいた。いつも通りの朝だ。

「悪い、またせた？」

「ううん、待ってないわよ神野」

「俺ア、割と待ってたけどな？」

「と、待たせたなら悪」

「言わずともいいことを言うんじゃないバカ修介！」

……目の前の光景に思わず股間を押さえそうになった。

「おっ……あ、テメツ、コレ……洒落に、なつて、ネエ……」

頭をたたかだとかそんなレベルじゃあない。

明らかに全力で、的確に、無慈悲に、徹底的なまでに。

由井は修介の股間を蹴り上げていた。

修介は股間を抑えつつ地面にへたりこんでおり、比喻でなく脂汗がにじみ出ている。

……一男性としては同情することしかできない。

「余計なことを言う修介が悪いのよ」

「クソッ……テメ、あとで覚えてるよ……」

「あー、実際に俺が遅かったのが悪かったわけで、その、ね？」

何が、ね？なのかが分からない、いやまて、ちゃんと考えれば分かるはずだ、むしろ今俺は多分正しいことをいつているはずだ……ただまあ、ヘタれているという自覚はある。

けれど、けれどだ仕方ないじゃないか。

自分の息子の命がかかっているのだから！

「ごめん神野、これは私と修介の問題よ」

いいつつ由井は、自分に背中を向けてまるまっている修介の体を寮内用のスリッパで踏みつけた。

グイグイという効果音が聞こえそうだ。

揺れている この状況で揺さぶられることがどれだけつらいかは俺もよく知っている。

修介の顔は脂汗だけでなく真っ青になっていた。

どうする、何ができる 思考する／結論を出す。

奇しくもそれは岬の表情と同じものだった。

岬の表情は語る。

無理よ、諦めなさいと。

俺は修介に心の中で謝罪しつつ、視界の一部からの情報をシャットダウンした。

「ほら急いで！ 遅刻するわよ！」

声を強めて言う由井に続くように廊下を早歩きで渡る。

「チツ、誰のせいで遅くなったとおもってんだよ」

「何かいった？」

「……何でもネエよ」

清々しい笑顔の由井に修介は一瞬どこかを守るかのように腕をピクリと動かし、しかし恐らくは意思の力によってそれを止めた。

修介のためにもどこを守るうとしていたのかは考えないようにしよう……いやまあ答えはでているんだけども。

ガラリと開く教室のドア 扉を開けた由井はまず先に入り、続いて俺、修介、岬と続いた。

ザワザワと、ところどころで話す声が聞こえ、けれど扉が開いた音によってこちらに注目が集まった途端ピタリとそれは止まった。

大半のクラスメートの顔に畏怖の表情が張り付いていた。

「……………」

俺たち四人は誰も何もしゃべらない。

もう慣れてきたことだけでも……それでもやっぱり少しだけ悲しい。

当然だろう、天才と規格外そして天才にうち勝った俺がいるのだから。

訓練中の殺傷は明らかな故意が無ければ事故とみなされる。

だから……こちらの機嫌をもし損ねてしまうようなことをしてしまえば自分達にその矛先がいくかもしれないと、事実はどうあれそう思ってしまうのは仕方ないだろう。

そう理解はしていても、やっぱり少しだけ悲しかった。

クラスの視線が外れていく　まるで自分を見咎められたくないかのように。

それを見て、あはは、と由井はかわいた笑いをこぼした。

「嫌だなあもう、私は大した実力もないっていうのにこの扱い……」
「……仕方ねえだろうが、けどよ俺は正しいと思うぜ」

小さな声で答える修介。

「これがただしいっていう」

「勘違いすんなよ」

ああくそ、恥ずかしいから一度しかいわねえぞ？と修介は言った。
心なしかその顔は赤みを帯びていて。

「お前は優秀だよ、比較対象に霧島と神野と俺を選ぶのがまちがってんだっての」

「……そうかなあ」

「……それに、それだけじゃねえよ　例えお前が弱かろうがあいつらは正しいんだよ。」

ああクソ、本当に一度しかいわねえぞ」

「お前の敵は俺の敵なんだよ……ようするにお前にケンカする

「やつは俺にケンカうつてんのと同じなんだよ」

そういいきつた修介の顔は間違いようのないほど赤くなっていた。きつとああいう顔をしてほしくなかったから言ったんだろっけど、もつといい言い方があっただろっに。

けどまあ、やっぱり修介はいいやつだよなあ……

「……………、バーカ」

「……………うるせえよ」

言葉を聴きつつ、後ろを振り返ると岬がいて、俺と視線があって微笑んだ。

釣られるように俺も微笑んだ。

登校 クラス (後書き)

男性人の立場弱いなあ……

HR 授業

いつも通り廊下から手前側の最前列に座り、岬達と話していると信一先生が教室に入ってきた。

俺たちのときは違った意味でシンと静まる教室。

「おはよう、出席の確認を取るぞ」

教壇の前にたち、そうつげるなり点呼を始める。
自分の番になりはいつ、と答え手を上げる。

やがて信一先生は生徒全員の点呼を終え。

「連絡事項だが……今日のところは特にない　　が、今日は模擬戦もあるので気を引き締めておくように」

いやー、意外に先生らしいよなと最近は思い直した。

初見の印象だと、怖い人っていうか厳しい人というかそんなイメージしかなかった。

第一印象っていうのはあてにならないもんだなあ……いや、怖いとか厳しいとかはあながち間違っただけさそうだし、それも何か違うか。

……ふむ。　怖かったり厳しかったりするだけじゃないってことかな。

3時限目、教壇に立っているのは基礎魔術の先生である。顎にひげを蓄え髪をオールバックにした30台半ばの竹中先生は、その眼鏡をかけた顔がダンディーだと一部の女生徒から人気……らしい。

個人的には先生のほうが男らしいとおもっただけけど、いやまあ……あの人は獣的な感じがするけども。

「さて、基本的なことを確認しよう。」

今回は君達もつとも用いている固定魔術の魔術障壁だ」

固定魔術とは詠唱無しで発動できるものであり、その最たる代表が魔術障壁である。

というよりもこれ以外はほとんどがオリジナルの固定魔術なのだ。けれど、俺はこれを発動することが出来ない　　といよりも発動してはいけない、魔力の無駄使いになってしまう。

「皆も知っているとと思うけど、魔術障壁とは魔術の効力を己が体内魔力によって減衰するものであり、これによって僕達魔術師は一度の攻防のミスによって死ぬような確立をグンと減らしているね？

だけどこれって実は結構なデメリットがあるんだ。

もつとも今ではそのデメリットが当たり前といった感じで、そもそもにしてデメリットとして扱わないようになってきているけれど、ね？

さて皆に質問だ、何がデメリットなのか分かるかい？」

尋ねる竹中先生、隣を見れば修介が俺を顎で指していた。

なるほど、これは俺が答えるのが適任だろう。

右手を挙げて竹中先生の顔を見据える。

どうやら他に手を挙げた生徒はいなかったらしく、俺に視線が集

中する。

「なるほど……そういえば神野君、君はある意味そのことを僕より知っているね。」

では神野君、よろしくたのむよ」

言葉に、はいと答えて続ける。

「その効果が魔術に対して無差別なことです。」

医療魔術を受けたければ魔術障壁が発動しないようにしなければなりませんし、俺のように肉体を強化して戦うのであれば魔術障壁自体を諦めなければなりません。

何故ならば肉体強化とは自らの肉体を強化するのであって、当然のように魔術障壁の範囲と重なってしまいますからね」

その答えに竹中先生はその通りだといって微笑んだ。

「このようにデメリットはある。」

けどまあ命に代えられるものはないからね、魔術障壁を使うのは当たり前で、それに伴う弊害も当然のことと受け止められているのが現在の常識だね。

ところで神野君、あくまでこれは興味本位なのだが 固定魔術は固定魔術であるが故に一つしか使えないのだけでも、君は魔術障壁を使わない代わりに何をつかっているんだい？」

問われ、苦笑した。

ある人はこういった。無詠唱とは詠唱をしないという詠唱をしているのだと。

炎という言葉が一つなら、何も言わないというのまた一つなのだ。

さてはて、ではそれを魔術障壁につかっているのかということ……

別段隠し事をするほどのことでもないのだけれど、どうにも恥ずかしい。

「……いや、実は固定魔術をつかってないんですよ。

魔術障壁は使いたくても使えないし、かといってオリジナルをつくるような技量もありませんし」

「ほう、いやそれはすまなかった。

しかし神野君、確かに固定魔術を作るのは技量を要求されるがね、それはあくまで魔術障壁と同レベルのものをつくらうとした場合に限るよ。

効力の小さなものであればさしたる技量がなくとも作ることが出来る……もちろん効力は低いものだから、使い方は限られるのだけれどもね」

「……なるほど、どうもありがとうございました」

本当に参考になった。

簡単なものでもいいのか、要は自分にあうかどうかで……

けれど、まあ……簡単といっても一朝一夕でできるものではない、ゆっくりと考えていく事にしよう。

H R 授業（後書き）

まだ短い感じですし、どうしたもんでしょつかね……
ある程度区切りのあるところでおわらせたいですしどうしたもののか。

実技 流していこう

五時間目は授業の時間である。

俺は修介と校庭南西で模擬戦をしている。

「しっ！」

気合と共に一打 氷柱を破砕。

「生成を繰り返し、出現場所を変更」

修介の詠唱、吸い寄せられた魔力は通常 ようするに威力を加減した魔術だ。

生み出された氷柱は4、しかしそれは恭介を中心に10メートルほど離れた場所に四角形上に設置されており、そのサイズは以前に比べ格段に小さく1メートルほど。

「ま ずっ！」

「同時射出」

彼我の距離は20、つまりこれは。

攻撃の方向を散らばせて捌かせないつもりか っ！

ならばと身体を翻しつつ迎撃をしようとして、

「しっ」

身体が重い　これは避け切れないかっ！
体が崩れたまま捌きに入り、しかし避け切れず捌かねばならない
数は3。

右手左手を総動員し、捌けるか　否、不可能。
そう判断し、両手は動きつつも結果は見えていた。

「づっ」

左肩に氷柱が直撃し、吹き飛ぶ。

背中から地面に追突する直前、受身を取りすぐさま起き上がる。
だが拳を構えはしない、変わりに口を開く。

「はっ、はっ……まいった、俺の負けだ」

「……………いや、今のはノーカンだ。
試しにやってみたはいいが、あんなモン実践に耐えうるレベルで
出来る訳がねえ。

っていうよりも全力で戦闘してればあれくらいは避けられただろ
うが？」

修介のいいたいことは分かる。

これは両者の生命的な安全を取り計らった上での模擬戦で、つま
るところお互い同じ程度まで魔術を制限して戦っていたのだ。

だが、だからこそ全力だったらという言葉はいいわけにはならな
いと思う。

「今回の全力はアレだったんだから、やっぱりあれは俺の負けだよ。
例えあれをやり過ぎせたとしても次弾はもつとやり過ぎるのが難
しくなっただろうしね」

「アー、クソ。だからそもそも全力なら　　ってんなこといっても仕方ねえか。」

案外難しいもんだな、対等な条件ってやつは」

頷いて、ほうと息を吐く。

「悪いけど体力があんまり残ってない、今回はこれで終わりでいいか？」

40分ほど走りまわりつつ戦闘を行っていたのだ　　魔力的な限界ではなくとも肉体的には既に限界にちかい。

もっとも魔術もイメージを具現化するというものである以上精神的に疲れていくのだけれど。

「アー、構わねえよ　　神野とやるのはスリルがあって楽しいが、その分精神的に疲れるからな」

「俺は楽しいっていうより一杯一杯だけどな」

「アン？　お前男ならツエエやつと戦えたら楽しくなんねえか？」
苦笑。

「分からないでもないけど、あいにくそんな余裕はなくてさ」

今回喰らった氷柱だって、実戦レベルの威力だったら戦闘不可能なレベルのダメージを負っていたかもしれないのだ。

そう考えると余裕なんてものはどこにもない。

「ハッ、まあいいけどよ」

言って修介はどこか一点を見つめる。

その視線を辿るとそこには岬と由井がいた。

教師 橘信一

見れば分かった。

岬は手加減をして戦っていた 学園にくる以前のようには、異常ではないレベルまでというくらいだが。

「！」

声は聞こえない、聞こえないが由井が押されているのは分かる。手加減をしているといっても岬は不必要な防御はそもそもして必要ないのだ。

つまり異常なまでの堅牢さをもつ魔術障壁。

突破するには時間のかかる大魔術 しかしそんなものを構えている内に確実に三度は倒される。

だからからといって防御に意識を割き凌いでいても未来はない。

氷柱／火柱／土流／暴風 顕現されていくそれら。

手加減はされていても由井の防御を打ち破り、またその上で魔術障壁を破砕するそれ。

流石に一撃で決定打になるほどの威力は残らないものの、ギリ貧だ。

攻めることは出来ず、守る事もできず、ましてや勝利することなどは不可能に近い。

「……にしても霧島は何なんだ？」

アア？ そっぴい歴代二位だって試験管に驚かれた俺が、信一先生に歴代三位だって言われたのはそっぴいことかよ……」

つぶやく修介に、しかし俺は何も言わなかった。

推薦入学だつてこと伝えてなかったのかなと思いつつ。

「しっかし、まあアレだな……いい目標ができたっつーか？」

「俺に振られてもこまるんだけどな」

「いやいやお前以外の誰に話せるっていうんだよ、幼馴染なんだろう？
身近に自分より強いやつがいるってのはいいことだろ」

ああ、なるほど……天才は孤独だって誰かがいってたな。

競い合う相手がいない、目標にできる人がいない。

「俺の場合は目標じゃないから……なあ」

分かったからといって頷けるわけではなく、何故ならば言葉の通り俺にとって岬は目標ではない。

「アン？じゃあなんだっていうんだよ」

『 『

思考を取り消した。

「幼馴染だよ」

「意味わからねえ と仕掛けるか？」

視線を向けなおす、なるほど確かにそんな感じだ。
防衛に回り続けていた由井が前に踏み出したのだ。
そして同時、次の光景が予測できた。

「そりゃ無理だろ」

「……だね」

「速っ！」

詠唱の一部だけが聞こえ、予想通り由井が加速した。つまり、防衛にまわってはいは勝機無し、かといって魔術で攻勢にでも魔術障壁を突破できない。

ならばどうする？ 答えは簡単だ、つまりは魔術障壁の関係のない攻撃 肉体を用いた攻撃をすればいい。

踏み込みは中々に速く、だが直線的だ。

重心は完全に前へと向いており、あれでは攻撃をよけることはできない。

果たして、予想違わず岬の生み出した土柱が由井の足元を穿った。気づき、しかし止まれずに土柱に突っ込む由井。

「……いくか」

修介の言葉に頷く、勝敗は決していた。

岬達の下へたどり着くと、そこには信一先生がいた。

先生は由井の前に立ち、真摯な表情で言葉をつむいでいる。

「接近戦というものはリスクがたかいものだ。なるほど、確かにあの時はそれ以外に勝機はなかったかもしれないがね。」

逆に言えばそれだけしかないのだから相手には読まれているとい

うことだ。

恐らく神野森人あたりを参考にしたのだろうが、はっきりいって彼は参考にならない。

何故ならば彼は接近戦専門の魔術師とでもいうべきものだからな。第一あの手の戦い方は血のにじむような修練によってリスクを減らし、戦いの機微をつかみ　　そうようやく使い物になるものだろう」

言われ、下を向いていた由井は少しだけ泣きそうな顔で。

「でも、だったらどうすればよかったです!？」

先生が言った通り他に方法なんてなかったじゃないですか!？」

「そうだな、勝つ方法はなかった。

ああ、何か勘違いをしているようだから先に言っておこう。

私は別に勝てとは言わない。

言えることは一つ　　長く耐えられるようになれ」

いいか？

「お前は戦場で敵にあった、そいつは自分よりはるかに格上の魔術師で　　そうだなさっきと同じ状況だとしよう。

さて、そこでどうするんだ？　　勝てるかと信じて特攻でもするのか？

これだけは別に構わんがね、とは言わない。

絶対にやめろ、いいか絶対に、だ!

確かに実力差がある以上、逃げ切ることも難しいだろう　　だが

それがなんだ？

一人で勝てないのなら二人で、二人で勝てないのなら三人で

勝てるだけの仲間がくるまで必死に耐えればいいだけの話だろう。

いいか、戦場では仲間がいる、一人ではない　　それを意識して

戦略を組み立てるんだ」

戦争を経験した教師なのだ、そう思った。

教師 橘信一（後書き）

まったく関係ないですが個人的に、先生〓神野>〓修介>崎〓信一
先生〓斉藤>由井

という感じでキャラが好きです。

……あれ、男キャラ優遇されすぎのうような、いやまあ書いてた時
点で男ばかりで自覚はありましたけども。

ま、まあ、女の子は出尽くしてるわけではないので、うん、野郎ば
っかりにはなりませんよね……

一日の終わり

走る二人(前書き)

短いですorz

一日の終わり 走る二人

「はっ、はっ、しかし、はっ……意外、だったな」

息を乱しながらもそういう修介、その顔には汗が張り付いている。深夜の坂道、下り上りを繰り返す。とはいえ二週目、それもまだ下りだ。

「はっ、何が、はっ、だよ？」

答える、まだ息は乱れていない。

日課の訓練である 一週間ほどまえからは一人ではなく、修介と共に。

互いの格好はジャージである。

「いや、はっ、はっ、はっ、信一、はっ、先生がつ、教師、なんだって、はっ、よ」

「はっ、教師、はっ、らしい、はっ、だろ、はっ、あの人」

「はっ、はっ、はっ、ダアラ、それが、はっ、意外だったんだよ」

はっ、はっ、はっと息の音だけが聞こえる。

しかし修介の呼吸が限界近くまで乱れている 引き止め時、か遅れ、こちらの斜め後ろを走っていた修介に向かって掌を向け静止する合図を出す。

「はっ、はっ、ちっ……はっ、くそ、はっ、まだ、はっ、はっ、イケルっての」

そういう修介はしかし膝に手をつけていた。

「はっ……アアクソっ、はっ、はっ、はっ、体力の化け物がっ！」

はっ、はっと息を吐き呼吸を落ち着ける。

「一週間やそこらで追いつかれたら俺の立場がない」

「……アア、そりゃそうだな　はっ、けどよ、次は、はっ、もう少し喰らいついて、その、はっ、次はもつと喰らいついて」

「期待して待つてるよ、さて修介はクールダウンだ」

修介の肩をたたき、歩くのを促す。

やがて修介は、はっと大きく息を吐き出したあとに歩み始めて、俺もそれにあわせて歩いて。

「アア？」

「……うん？」

「はっ、いや、なんで神野まで歩いてるよ？」

はっ、テメエはいつも、はっ、走りだすだろうが」

「ああ、いやさ……走ってたらまともに話しはできないからさ、すこし話したらまた走るよ」

「……アア、意外だって、はっ……思ったってことについてか？」

頷く、修介ははっはっと息を整えながらコチラを見据えて続きを促す。

「いやさ、なんで信一先生が教師をやってるのかなーってさ」

「……アア？」

「どうみても先生若いだろ？いって25才かそこら。」

軍人を退役するには若すぎる……何よりも、ああいうことを言え

る人が軍人を辞めるとは思えない」

軍人をやめるということは戦友に別れを告げることなのだから。

「アアー、なるほど、なるほどな？」

んなもん決まってんだろつが、ドロップアウトだろつ。

正確には欠陥壊れた魔術師というのが正しいだろつけどよ。

軍人である以上どこにでもある話し、誰にでも起こる話しだろつ
「よ」

言葉に、なるほどと頷いた。

欠陥魔術師、か 多分それが正解だろつ。

同時、ある意味では自分もそうだなと思いつつ、トントンと道路を蹴った。

「それじゃま、もうすこし走ってくるよ」

「アア」

駆け出す。

一日の終わり 走る二人（後書き）

次あたりですこし本格的な戦闘にはいるかもしれません。

お誘い

「……はっはっ……はっはっ」

息を吸って二度に分けて吐く。

言葉はない、思考もない　ただ走る。

折り返し地点を通過し、上り坂をひたすらに。

「……はっはっ……はっはっ？」

視界の先、人影が二つ見えた。

おそらくだけれど一人は修介だろう、しかしもう一人は？

街灯もなにもなく暗い坂道ではそれがだれだか判別が出来ない。

片方を修介とするならば、お互いの身長はほとんど変わらない

つまりは長身。

そんな知り合いいたか？と思いつつ記憶を検索するも思い至らない。

(近寄れば分かるか)

そう思いつつ走るペースを落とし、早歩き、歩き、とかえていく。

距離がゆっくりとつまっていき、20メートルをきったあたりで

その二人が誰だかが分かった。

ひとりやはり修介、そしてもう一人は生徒会長　　斉藤恭介先

輩だった。

「こんばんは神野君」

「こんばんは斉藤先輩　俺の名前を覚えていてくれたんですね」

挨拶をしてくれた斉藤先輩は制服姿だった。

その隣にいる修介は斉藤先輩のほうを見て怪訝そうな顔をしている。

その気持ちは分かる、何故ならば斉藤先輩は寮長であるからだ。夜分に学園の坂道とはいえ、制服姿でここにいる理由は基本的にはないはずだ。

駅前の商店街は廃れていて買い物をするには不向きで、というかそれ以前に夜中にやっているような店自体がない。

ならば自分たちのように鍛錬？考えにくい。坂道である理由はないだろう。

「……有名だからな君たちは」

答える斉藤先輩の表情は無表情、だというのに会話に困っているという雰囲気を感じるのは何故だろう。

「有名、ですか？」

「有名だとも、1年生の間だけではなく上級生の間でも」

「……ンナこたあどうでもいいんですよ生徒会長殿。

あんたの言う通り神野もいるんだからそろそろ話していつのをして貰えませんかねえ」

明らかに上級生、それも生徒会長にする態度ではない修介に斉藤先輩は気分を害した風でもなく、そうだったな、といって微笑した。

「どうにも会話というのは苦手だな、すまない　さて本題なのが、二人とも明日の昼休みはあいているだろうか？」

「アー、別になんもないですけどそれがどうかしたんすか？」

「いつも通り友達と学食でお昼を食べにいくだけですな」

修介の言葉を補足する。

それを聞いて齊藤先輩は、それはよかったといった。

「急な話して申し訳ないのだが、明日のお昼休み……勿論昼食を済ましてからで構わないのだが、兎に角きてもらえないだろうか？」

「……それは、構いませんが、けどどうしてなんです？」

格別問題を起こしたというわけでもなし、特に呼ばれる理由は俺も修介もなかったと思うのだけれども。

「……ああ、すまない伝えそびれていたか。

君たちを生徒会にスカウトしたい」

齊藤先輩に俺と修介が昼休みの件を了承したことを伝えると、ではまた明日の昼休みにと言いついて残して齊藤先輩は坂道を上り始めた。

どうやら生徒会の業務が終わり帰宅途中に俺たち　修介の姿を見つけたので今日のうちに話をしておこうと思ったらしい。

しかし生徒会、生徒会ねえ……。

こちらと同じように立ち止まり、顎に手をあてている修介に尋ねる。

「修介はどうするんだ？」

「アー、正直悪くねえって思ってる。

こんなところの生徒会っていうことと俺らに声をかけたっつーことは、腕っ節も関係あるってことだろ？」

詳細聞くまではなんともいえないけどよ、今んところは悪くねえと思ってる」

「……俺も、そんな感じかな」

俺は強くなりたいのだから、恐らく強い人が集まっているであろう環境は望むところだ。

とはいえ話しも聞かないで決められるようなことでもなし、

「明日次第ってとこかな」

「だな」

すべては明日昼休み次第、か。

お誘い（後書き）

こちらがまだまだ序盤なのにあたらしい作品を投稿しちゃいました
（おい

世界観が別のお話ですが、全力でネタバレになっているのでご注意ください。

とはいえ一つの点を除いて物語に關係するネタバレは出ないので、完全に別のお話とだけみても何の問題もないはずですが。

素晴らしき生徒会

コンコンとノックを一つ。

昨日岬に今日のことを相談したら、頑張りなさいとそれだけを言われ、はてどういうことだろうと思いつつも答えはでないままここにきている。

「どうぞ」

木製の扉の先から聞こえた斉藤先輩の声、それをうけて開く。

先に俺が、続いて修介が中に入り、一礼。

『失礼します』

「……よく、来てくれた陣野君、御堂君」

視界の先、書類を長いすにおいてからこちらに向き直り微笑む斉藤先輩。

中は長いすを四つ正方形上に並べ、そこに2台ずつのパイプ椅子を置いただけの部屋だった。

イメージしていたものとは違うもので、それに少しだけ驚いて、しかし右手側に座っていた人物をみて驚愕した。

なんで赤髪発狂がっ！

にやにやと笑いながらこっちを見ている赤髪　いやまて落ち着こう、結城先輩、だったはずだ。

しかしまたなんでここに？

「よう、後輩！」

「……あの、なんで、結城先輩がここに？」

結城先輩は、あーあー、やっぱり守人も似合わないって思うか？といいつつ力カカツと笑って。

「こいつ、寮長兼生徒会長。」

俺、副寮長兼副会長」

斉藤先輩、自分自身と交互に指をさした後、にっあわねえよなあともう一度繰り返して、笑いという言葉を通り越し爆笑する結城先輩。

それに斉藤先輩はこめかみをひくひくと動かしつつ、一瞬眉間をもむような仕草を見せ、こちらの視線に気づいたか若干赤面しつつもコホンと咳を鳴らし、俺たちから見て左手側にいる女性を手の平で差し告げる。

その苦労しているんだなあという仕草に妙な親近感を得たのは置いておいて。

「会計の近藤^{ことだつ} 美香^{みか}さんだ」

茶髪の短い髪の 日焼けしたその肌もそうだけれど勝気な表情といい、文字通りの意味でボーイッシュな人だ。

「ヨロシクー」

パイプ椅子の背もたれにもたれかかったままいう近藤先輩。

「よろしくお願ひします、えと神野です」
「アー、よろしく」

ニシシと鼻頭をかいて笑う彼女。
そして斉藤先輩が驚愕の言葉を告げた。

「……以上が今期の生徒会役員だ」

「……え？」

「……ハア？」

……はい？

え、いやだって三人？

「おいおい恭介、それじゃ説明が足りネエぞ。」

いいか？ここ重要だからしっかりと覚えていてくれよ？
俺研究者志望、すなわち非戦闘要員。

ラヴ&ピースが信条なのよ」

いやいや愛と平和とかどの面下げていつてるんですか赤髪さんっ
！？

アンタどうみても戦闘要員でしょ外見が、主に髪とか髪とか！

驚愕する俺たちを置き去り、近藤先輩がハイハイと勢いよく手を
上げて告げる。

「ワタシもワタシも非戦闘要員！

軍人志望だけど、その、ね？

ワタシってか弱い女の子だし？」

そこらへんの男をなぎ倒すのが趣味ですといわれたところで何の
疑問もわからないのですが……

「……オイオイ、冗談だろ？」

修介の言葉に全面的に同意したい、そうこれが冗談なのだ。
一縷の望みを信じて斉藤先輩を見つめ、

「……以上が」

今度は眉間をもむことを隠そうともしない斉藤先輩。
希望はなかった。

「以上がっ……以上が今期のっ、生徒会役員だっ」

カッカカカ。
ニシシシシ。

嗤う二つの声が生徒会室を包む。

……、
……、

「いい加減にしろ、俺の言いたい事が分かるな？」

どこから取り出したのか、日本刀を片手に斉藤先輩が宣言する。
腰には鞘、右手に持たれた日本刀は当然抜き身であり。

「あははー、い、いやだな恭介！」

これはあれだ、後輩の緊張をとろうとした俺たちの粋な計らいっ
てやつだ！」

「そ、そうよ恭介君……いやねえもっ！」

はははっとかすれたように笑い、そして沈黙が訪れた。
やがて斉藤先輩がはあと盛大にため息をつき、パチンと指を鳴らした。

瞬間僅かな魔力の集中と共に日本刀が、腰にすえられていた鞘と共に消失した。

「というわけで、主に風紀的な面を支える人員が不足しているんだ。いや、正確には去年まではこれでもなんとかなっていたのだが、流石に新入生もとなると俺一人では難しいものがある。」

だから、出きればっ、君たちには生徒会に入りその手伝いをしてもらいたい」

出きればというその声が、ものすごく悲痛なものに聞こえたのは気のせいじゃない。

頑張りなさいってというのはこういうことだったのだろうか……

素晴らしき生徒会（後書き）

戦闘にはいれ、ないorz

次話ではいれそうですが……

これで1章の主人公サイドの登場キャラクター、及び立ち位置は大
体が出揃いました。

と毎度毎度しつこいようですが感想お待ちしております。

あえて主人公たちの立ち位置を書く……

神野 熱血兼弄られ系主人公

修介 天才兼不器用系幼馴染

斉藤 クール兼苦勞人系生徒会長

なんでしょう男キャラだけでもこのカオスっぷりは。

……、

……女性キャラ全員に弄るとい言葉がつくのは確定でしょう
ね。

生徒会長 齊藤 恭介

「……そう、ですね」

考える、思っていた通り内容は治安維持に関するもので。

「答える前にちよといいですか？」

「御堂君、何かな？」

「いや、何……なんでここに霧島がいないのかって思ってよ？」

てつきり女の子だからかっておもってたんだけどよ、そこにもいるだろ？」

「……とどうしてか？とおもってな。」

「こつ言つちまうと情けないけどよ、俺よかアイツのほうが強いぜ？」

「私！非戦闘要員のか弱い女の子！」

齊藤先輩、修介共に完全なる黙殺。

「……ふむ」

齊藤先輩がこちらを見る……なるほどそういうことか。

問題は何故齊藤先輩がそれをしてしているかだが、生徒会長だから生徒の個人情報も知っているのだろうとしか考え付かない。

伝えてないのかね？とでも尋ねるような視線に、俺は首を横に振った。修介を信頼していないわけじゃない、けれどアレは彼女自身と言つべき事だからだ。

「彼女には彼女の理由があるのだ……少なくとも、彼女はこの仕事

には向いていない。

いやそれでも彼女の能力は有用だが、しかし彼女自身が生徒会に入るのを望まないだろう」

「……なるほど、ちなみに理由とかは聞いちゃいけないんすかね？」

「本人に聞いてくれ、俺がそれを答えることは出来ない」

「……ま、そりゃそうか……了解した生徒会長殿 俺は入るぜ。」

別段目標とかもねえから時間もありまってるしな」

至極あっさりといった修介に、斉藤先輩は安心したようにほうと息を吐き、ありがとう御堂君といった後にこちらをみる。

「神野君はどうかね？」

「……そう、ですね」

考えている、考えれば考えるほどこれは俺にとってメリットばかりだ。

斉藤先輩は実力者だろうし、何より治安維持という名目上戦闘経験をつむことができるだろう。

デメリットといえば時間をもっていられることくらいか。

問題はどのくらい時間をもっていられるか、だけれども。

「……その、別に今すぐ答えを出して欲しいのではない。

だからゆっくり考えてからで」

「いえ、入らせていただきます」

遮る。

どれほどの時間を持っていかれようが強くなれる可能性が目の前にあるのだ。

ならばそれに乗るべきだろう。

それにこちらは一年生である上に斉藤先輩の性格を考えてみれば

時間とて出来る限りの融通はしてくれるだろう。

「……ありがとう」

「おう、二人ともよろしくなー！」

「よろしくねー」

「……ただし、条件というかお願いがあります」

「……それは、何かな？」

斉藤先輩、俺と手合わせ願えませんか？

一瞬の思案後、斉藤先輩は首を縦に振った。

木製（ただし概念としての材質強化及び対魔術付与がされている）の床を踏みしめ入室する。

体育館だ。

思い立ったが吉日というわけではないのだろうけど、あの後すぐに行くことになり、ここに移動した。

校庭は一般の生徒の訓練によって自由に戦える状態ではなく、だからこそここが選ばれたのだろう。

もっとも一般開放されているわけではないらしく、職務上マスターキーをもっているらしい斉藤先輩がここを開けた。

職権乱用というやつだからな、黙っていてくれると助かる……

そういつた斉藤先輩を結城先輩がお堅すぎるんだよと笑い、近藤先輩がそれにネーと賛同した。

「……さて」

体育館の中央に移動すると同時、斉藤先輩はパチンと指を鳴らした。

「 顕現」

空中に現れたそれは先ほどの日本刀。
既に抜かれている状態のそれは、斉藤先輩の右手に納められ。

「 それを、使えますか？」

「 ああ俺の武器はこれだ」

美しい黒と白二色の調和 俺には刀の良し悪しなどわからないけどもそれでもそれは良いものなのだろうと感じた。

刃渡りは60センチほど、一般的な日本刀の長さは知らないが、それだけのリーチの差が出来るのだと思わした。

それは近距離戦において確かな有利性だろう。

しかしそれを考慮に入れた上でおれは疑問に思う。

そんなもので戦えるのか？と。

即ち 肉体強化をした当方に届きうるものなのかと。

そんな俺の考えを読み取ったのか、水平に刀を握ったまま右手を突き出して斉藤先輩は語る。

「 神野君、勘違いをしているようだから教えよう。

これは君が思っているようなモノではないよ。

確かにこれは日本刀で、なるほど君の強化魔術の硬度にこれは劣

るだろう。

しかしこれは君にとって最悪の相性とでも言うべきものだ。何故ならばこれは 魔法使い志木しきただあり 徒有の作りしものだからな。君も知っていると思うが、彼の法は物に定義を持たせること。つまりこの刀 言い伝えでは斬魔刀というのだそうが、その定義は文字通り魔術を切る。

故に強化魔術を切るこれに……君を切れないという道理はない」

志木、その名前には聞き覚えがある。

この国にすむ人間ならば皆知っているだろう。

彼は魔術師ではなく、魔法使いで その中でも特に異端だった。魔による法律 定義されたルール。

それを扱うのが魔法使い。

異端である 己が魔法に関する魔術しか扱えないということ、そもそもにして国単位で探したとしても数人しかいないほどであること。

魔法使いとは天才なのではなく、異端なのである。

そもそもにして違う存在と誰もが言う。

ああしかし彼はその異端の中でも一際異端だった。

魔法を、限定的にはいえ物を通して作ることができたのである。

彼の魔法使いとしての限界はそれを10作ること。

そのうちの一つが目の前に……？

しかし、そんなことよりも疑問に思うことが一つ。

「なんでそんなことを教えてくれるんです？」

苦笑。

「出来るだけ対等な条件で戦いたかった、でいいかね？」

俺は君の戦い方を知っていて、君は俺の戦い方を知らない。それではまともな勝負になりはしない。

何よりも、俺は君の実力を知りたいんだ。

御堂君のようにわかりやすい強さを持つわけではない。

正直、神野君が修介君に勝っていなければ俺は君に興味をもつことはなかったと思う。

テストの結果についても君がだしたものでは無いと聞いていたの
でね。

しかし君は御堂君に勝った 強いんだろう、強いはずだ。

だがそれは見て分かるようなわかりやすい強さではない。

正直に言うと、君が俺と戦いたいなどといわなくとも、俺から君
にお願いしていただろう」

「勝った勝ったしつけえよ」

後ろのほうから修介の声。

若干すねた感じのするその声に、目の前の斉藤先輩と同じように
苦笑してしまう。

「分かりました、斉藤先輩 その刀そ性質心に留めておきます」

コクリと頷いた斉藤先輩が、しかし真顔で告げる。

「始める前にいっておこうと思うが、相性の問題だからな 君が
負けるのは仕方がない」

挑発、ではない。

どこまでも真剣な表情でそれが本心なのだと分かり、だからこそ、

ハッ、と息を吐き捨てる。

拳を構え、距離を認識する。

互いの距離は10。

なるほど、確かに相性は悪いだろう。

言葉の通りならば俺は攻撃がかかることさえも許されない。

切られれば体を対象としたものである己が魔術は霧散するだろう。

「戦闘のことになると随分と饒舌になるんです、ねっ！」

「ああっ！よく言われるよ！」

言葉と共に斉藤先輩は大きくバックステップを踏み、詠唱を開始した。

時を同じくしてこちらも、踏み込みつつ詠唱を。

吸い上げられる魔力はほぼ同じで

「 肉体強化を開始する」

「 強化魔術を行使する」

魔術が行使された。

世界が遅くなっていき、しかし、俺と斉藤先輩だけの体感速度は変わらない。

即ち同レベルの強化魔術。

ここに戦闘は開始された。

生徒会長 齊藤 恭介（後書き）

書くたびに自分の作品はおもしろいのだろうか？と悩みます。

自分の好きな物語をかいているんですが、それをおもしろくするにはどうすればいい？と思いつながら書いているのですが やっぱり怖いですねー。

それが楽しくもありませんが。

あ、毎度毎度申し訳ないですが感想はいつでもお待ちしています。何気に今回いままでの中では一番ながいような（それでも短いですが）

斬魔刀

肉薄する！

最初の一步は同速、しかしあちらは後ろに飛んだ以上その速度は2歩目以降は続かない。

着地後の硬直をねら、

「 甘いぞ神野君！ 」

着地と同時に上段から振り下ろされる一撃。

距離は3。

つまりは突っ込む形の俺に斬撃を置いておく形、かつ！

「 甘いのは 」

右に大きくステップを踏み斬撃の範囲から逃れ 違和感

斉藤先輩 否、目の前にいるのは己が敵、恭介の構え。

振りかぶっていない、コンパクトな上段からの一撃 明らかに
体重が乗っていない。

ま、ずい！

「 君のほうだ！ 」

ビタリと上段からの一撃は止まり、刃の向きが変わる 縦から
横へ。

見ている、それを見ながら次の行動を予測し。

斬魔刀から右手が離れ、左手のみによって斬撃が放たれる。
あたかも初めから横殴りの斬撃だったかのように動き出す斬魔刀。

当然だ、重心を置いてなかったのだから！

しかし予想通り、予想通りそう繋がった。

だからこそ、と左足に力をこめる。

腰を狙う斬撃　ならば掻い潜ればいい。

いつもより深く、深く！

つま先で地面と強く蹴りだす。

上半身を倒し尚且つ這うように

「　せいっ！」

疾風が頭を通り過ぎた。

やり、過ぎた！

しかし同時に気づく。

距離は既に1、ここは己が間合いである。

だというのに攻撃できない。

極限までの前傾姿勢　そこから打ち出せる攻撃は存在しない。

「　まずっ　」

「　しっ！　」

ここで恭介が逆に肉薄する。

同時に放たれるは右の回し蹴り。

避けられない、捌けない、か！

左手を持ち上げ脇腹をガードするように上げ　お構いなしに蹴
りが叩き込まれた。

「がっ　は！」

衝撃に吹き飛ばされ、空気も吐き出し、しかし右手と両足を使い
衝撃を地に流す。

飛びずさるように立ち上がり、拳を構えようと

「　炎よ！」

構える前に追撃がきた。

くみ出された魔力といい平凡な火球　だというのにやっかいだ！

炎である以上打ち砕けない　魔力を拳にまとわせる時間もない。

受けるしか、ない！

胸を穿つ炎を無視し、拳を構え切る。

業と迫る炎に対し、心構えをし、

「　ぶ　ぶ　ぶ　」

胸を穿たれた　だが耐えられるレベルだ。

「　ら　っ　、　あ　あ　！　」

吼える　恭介の狙いは読んでいる。

先ほどの炎に対処を迫られた瞬間に生じる隙をつくことだろう！

「　ぬ　っ　！　？　」

眼前に迫るはやはり恭介。

距離は1もなく。

先ほど左薙ぎに使われた斬魔刀は、その握り方を反転させ、あたかもトンファーのごとく腕に張り付きながら振るわれようとしている。

おおよそ日本刀の使い方ではない、だが斬魔刀あれに限ってはこれで正しいのだろう。

左拳を振るう　狙いは恭介の左手！

刀をたたけないのであればその握り手を、そしてこの距離ならば先にこちらが穿つ！

だが、恭介の斬撃は先ほどのように1から0へ、ピタリと止まる。動いた先を計算に入れて放った拳は宙を切り、

「ちっ」

舌打ちを鳴らしつつカバーの右回し蹴りを放つ。

それに対して恭介はさがることによってそれを回避し、賞賛した。

「……正直、最初の何手かで詰むと思っていた」

その言葉はおごりでも何でもなく事実だろう。

危うくその通りになりかけた。

はっと息を吐き、しかし拳の構えは解かないまま言う。

「お褒めにあずかり光栄ですね、けど先輩　対等な条件でというのならもう少し詳しく説明をしてほしかったですね」

「しっかりと言っただろう？相性の問題だ、と！」

言い捨て踏み込んでくる恭介。

「速い　急激に距離が詰まる。」

「意地が悪い！」

つまるところ、恭介はどんな体勢でもいいから斬魔刀さえあてれば勝ちなのだ。

あたりさえすればこちらの強化魔術は霧散し、強化が継続されているあちらと比べ、否比べるのがバカらしいほど虚弱な体がさらされる。

故に通常の剣技のように人を殺しうる重みのある斬撃は必要がない。

重みのない攻撃　だからこそ変幻自在。

そして、すつ、と魔力が集まっていく。

「　土よー！」

土槍が襲い掛かる　これもまた通常の魔力。

しかし今度は捌ける　否、捌くしかない。

物理的なものであるかわり、土は固いのだ。

避けるという選択肢はない　体を崩せば追撃にて確実に詰まされる。

左衝掌で土槍をそらし、やはり追撃に来ていた恭介を右拳で迎撃しようとして　不可能と判断し、上体をそらす事によって横殴りの斬撃をやり過ごす。

「くっ」

思わずうめきをもらした。

こちらの攻撃が届かない距離　　斬魔刀分のリーチの差。

その範囲から攻撃、かつ。

間合いをつめようにも主導権はあちらにあり、無理に攻めれば態勢を崩す。

崩せば斬撃は喰らわないにしる間違いなく体術で一撃と共に突き放される。

しかし守ってもジリ貧　　打開策、をっ！

斬撃が俺の体を捉え、しかし直前で停止した。

「俺の、負けです」

結局主導権を握られたまま押し切られた、か。
息を整えながら一礼した。

斬魔刀（後書き）

長く続けてもうまくしまりそうにないので戦闘は中略をしました。
主人公は強いけれど、必ず勝てるわけではないということがつたわ
つたらなーと><

と、これもある意味肉体のみで戦っている神野のリスクでもありま
す。

接近戦でもし劣ってもその劣ったものでしか勝負をできません。

しかし、生徒会長は万能キャラだったはずなのにどちらかというと
接近戦キャラになってしまったような……

いつも通り感想や誤字脱字など待ちしております。

悔しいなあ……

日課の訓練を終えて、部屋に戻る。

シャワーは既に浴びたし、今日はもう他にする気力がない。

「負けた、なあ……」

今思えば先生以外に全力で戦って負けたのは初めてな気がする。いや、そういうことじゃないこの気持ちはそんなことでこんな気持ちになってる訳じゃない。

「ああ、クソっ」

ジャージ姿のままベッドに倒れこむ。

反転し、天井を見上げて……

なにも出来ずに負けた。

得意の接近戦、これ以外には出来ないという接近戦でだ。

これだけとは思って努力してきた。

けど負けた……これ以上ないってくらいに。

「情けないよな本当」

先生に負けてもここまで情けないわけじゃない。

師であるだとか俺よりも圧倒的に強いとかそれだけが理由じゃない。く。

きつと俺は、心のどこかであの刀さえなければという浅ましい想像をしてるんだろう。

だからこんなに情けないんだろう。
情けない、本当に情けない。

負けは負けだ、今はこんな風に落ち込むよりも強くなる努力をするときじゃないか？

そう思える、そうすべきだと理解している。
けれど体が、心が、鈍い。

「本当、情けないな」

「どこが情けないの？」

「……さ、き？」

聞こえる声はすこしくぐもっていて、ああそうか、岬は隣の部屋だったか。

薄いコンクリートが隔てるその先、岬はきつとそこにいるんだろうと思う。

体を起こして壁によりかかる。

コンと壁が音を立てたのを聞いた。

「だから、どこが情けないの？」

「あのさ、おれさ、驕りだとは思いつけど
接近戦なら負けないっ
てそう思ってた。」

勿論先生は例外だけでも、だけどそれ以外の人には負けないって、
そう………思ってた。

だけどさ、今日まけたよ。

情けないよな、得意のことで負けて 負けた言い訳を探して！
でもさそれを言い訳にすることも出来なくて！

あまつさえここで弱音を吐いてる！」

心の吐露。

それに対して幼馴染はいう。

「……それがどうしたの？」

努力したもので負けたら悔しいのはあたりまえでしょ？
得意なもので負けたら悔しいのは当然でしょ？

それは、他人から見れば情けないと思うかもしれないけど、私は知っているわ。

神くんが努力していたその姿を。

だから悔しがっていても情けないだなんてこれっぽっちも思わない。

いえ、違うわね　今はまだ思わない。

そうね今日くらいはずつと悔しがっていてもいいと思うわ。

でも神くん、明日は努力するんでしょ？

次は勝つんでしょ？

私はいつも努力している神くんが悔しがるのを、情けないだなんて思わないわよ。

だから私が神くんを情けないだなんて思うのは神くんが努力するのをやめた時。

そのときは例え誰に勝とうが何をしようが私は神くんを情けないと思う。

だって私はしっているもの。

努力し続ける神くんをしっているもの……」

壁から背中に暖かさが伝わってきた気がした。

あるいは岬も壁に背中を預けているのかと思い。

「……ありがとう」

伝わらないかどうかという小さな声。

ああでも伝わったみたいだ　コンという音が聞こえた。

壁をノックする音。

別にこういうことが前にもあったわけじゃない、だからこれは単なる予想だ。

きつと岬は頬を赤く染めているんだろうな

根拠は何もない、だから予想と呼ぶのもおこがましい妄想だ。

けれど同時にきつとそれであっていると思う。

鈍かった体と心は戻り、それと時を同じくして暖かさが壁から離れたような感じがして。

「悔しいなあ……」

だからそうつぶやいた。

考える、どうすればよかったのかを。

冷静に考えれば手も足も出ないわけがない。

強化魔術は同程度　あちらには単に斬魔刀という付属オプションがついて
いるだけだ。

考えれば考えるほどこうしたほうがよかったというものが思い浮かんでくる。

だから前向きにその考えを頭に刻んでいく。

何故思いつかなかったかのかと悔しくなる。

けれど前向きに、その悔しさを糧として。

そうして違和感に気づいた。

そこから一つの推測に至った。

疲れが意識を闇へと誘い。

そうして俺は闇へと落ちていく。

落ちていきながら思う。

俺が急に強くなるだとかそんなことは在りえない。

俺は天才ではないからだ。

認めたと上でもそれでもと俺は思う。

斉藤先輩、次は俺が勝ちます。

そうして意識は闇に呑まれた。

悔しいなあ……（後書き）

いつも通り誤字報告と感想をお待ちしています。

祭 予告

「神野、おはよう」

「ああ、おはよう修介」

シャコシャコと歯ブラシを動かしていると修介が現れ、隣についてた。

「もう立ち直ったか」

「ひよへ？」

ほへ？と聞いたかった。

それだけでもアウトだけでもそれをさらにもごもごとした感じでいってしまった。

手を止めて、

「くくつ、こりゃ本当に大丈夫そうだ」

「……何がだよ？」

笑われ、しかし安堵したような修介の表情にそう返した。

「あん？ ああいや、昨日のお前負けてから大分落ち込んでたみた
いだったからよオ？」

「……ああ、もう大丈夫だよ。」

何より、次やれば勝てる算段がついたしな」

実際は気安く勝てると思うほど簡単なものじゃなく、お互いの意

思疎通が出来なければ俺がぶつたぎられるんだけども。

「そうかそうか！ ああ、でもよ？ 俺もあの生徒会長殿とはやってみたいからよオ、再起不能にするんじゃないやねえぞ？」

冗談 それと分かるような表情でいう修介に苦笑した。
歯磨きを再開。

「あ、その……おはよう岬」

コンコンとノックを。

岬の部屋の前に立ち、暫く待つと。

「おはよう神くん」

昨日のことですこし恥ずかしかったというか調子がちがったというか、とにかくそんな俺とは違って普段通りの岬がいた。

「そろそろいこーよ？」

「……まっ、なんだかんだでいつも通りギリギリだな」

「そうね、待たせてごめんなさい。」

「行きましょ神くん？」

「あ、ああ」

四人で登校、短い道のりといっても男女のグループに分かれることになる。

岬と由井が先に、俺と修介が後に。
そこで信じられないものをみた。

ノックしてから出てくるのがおそ
そこから先は聞こえなかった、というよりも由井が意図して聞こ
えないように声を潜めたんだと思う。

問題はそこじゃあない。

岬の顔が真っ赤にそまったのだ。

照れるように恥らうように。

唇がどうしてわかったの？と動き、

「アン？ はっ、青春してんな」

そう言った修介の意図が良く分からなかった。

朝のSHRの時間。

俺たちはいつも通り右側一番手前の席に座り、雑談を交わしながら
信一先生をまっていた。

やがて信一先生が現れ、教卓につくと同時先生はこういった。

「軍祭ぐんさいを知っているか？」

その言葉に修介の唇がニイと釣りあがった。

「当然じゃないすか！」

獣といった表情で言う修介に信一先生は苦笑し、まあ知っている
とは思うがと言い。

「その正式な日程が決まった。

今月、5月20日に行く。

丁度二週間後な訳だが、まず俺が貴様らに聞かないといけないことがある。

お前らは軍人を希望しているはずだ。

そういう人間があつまってこの1組を作っている。

ああ、だから聞くまでもないことなんだが。

軍祭に参加するかね？」

当然という声が重なった。

「よろしい、過半数をこえたものと判断する。

勿論個人単位での辞退は自由だ。

ではリーダー……小隊長を決めようか？」

と尋ねた信一先生は、しかし。

「いや、それよりも前に説明か。

皆も知っているとは思いますが、これはクラス単位 40人規模の小隊戦だ。

勝敗条件は二つ、時間切れ時点の戦闘可能人数の差。

もうひとつは敵小隊長の撃破。

この二つが勝利条件だ、逆に言えば敗北条件でもあるが。

さてこの後の特別ルール。

新1年生は担当の教師一人が参戦して良いということになっているが、今回俺はそれを辞退した。

理由はいわずとも分かると思うが それだけじゃない。

お前らは例年に比べ優秀だ。

2年生と比べて遜色ないほど、とまでは言わないが 正直にい
って去年の新1年生より実力があると断言してやる。

だから俺は辞退をした。

問題があるとすれば新一年生の小隊長をカバーするのが教師の役
目でもあったということだが。

さて、小隊長は誰がやるべきだと思っ?

自薦他薦なんでも構わん」

……まず、視線が俺たちがいる席に集まった。

俺は修介を見る 俺を見ている。

俺は由井を見る 俺を見ている。

俺は岬を見る 俺を見ている。

三人揃って口を開き。

『神野君がいいかと』

賛同するようなこえがちらほらと聞こえた。

どうしてこうなる……

祭 予告（後書き）

祭編というほど長いものじゃなかったりします。

話し合い

「ちょっと待ってくれ、どうして俺なんだ？」

おかしい、流石に岬がやるべきだとは思わないけれども、修介がやったほうがいいと俺は思う。

「アン？ ハツ、そりやお前、お前が男だからだろう？」

ニヤニヤと笑っている修介。

「ふざけるなよ修介　小隊長が倒された時点で勝敗が決まる勝負で、どうして俺を小隊長にする」

この言葉に何人もの生徒が頷いた。
やはり修介もしくは岬が小隊長をしたほうがいいと思っている人のほうが多いようだ。

俺が魔術障壁を使えない以上、魔術に対する抵抗値ははっきりいって俺が一番低い。

捌くにしろ避けるにしろ限界がある。

限界がおとずれると俺は強化魔術をかけてあるとはいえ生身の肉体で受けるしかない。

一対一なら致命的なハンデではない　今までのように対処できる。

だが多対一なら話しは別だ。

捌ける数の攻撃ではない、避けきれただけの攻撃でもない。
両方を同時に実行しても肉体に魔術が突き刺さるだろう。

こちらの雰囲気を探してか、修介は笑みをとめて言う。

「アー、真面目に答えると、だな。」

軍祭ってというのはクラス単位で行われるトーナメント戦、だろうか？
ま、例年なら俺が霧島が小隊長つてのが妥当だろうけどよオ？
違うだろう今年は？

優勝を狙うなら俺が霧島が小隊長じゃ無理なんだよ」

「何がだよ、魔術障壁の硬いやつが小隊長つてというのが妥当だろ」

どれだけ小隊長が耐えられるかが肝なのだ。

だからそう返すも、次の言葉に言葉が詰まった。

「ダアラ、優勝目指すならつってんだだろうが。」

魔術障壁？それがどうしたよ。

「忘れたのか 全学年が参加する以上、生徒会長殿も参加するんだよ。」

魔術障壁があるうがなかるうが関係ねえだろうが」

斬魔刀

「……ああ、なるほど、な。」

けど、だからって何で俺が？」

この前戦った通り相性は最悪だ。

勝てる算段はついたけれども、それでも相性が悪いことにはかわりがない。

「いいたかねえが、俺たちじゃ耐え切れないんだよ。」

普通の勝負だってんなら勝つ自信はあるけどよオ？

アア、タイムンで、尚且つ場所に制限がなければよ。

距離とって捌けきれない量の魔術をぶつけりやそれで勝てるぜ？
けどよ、あくまでこれは団体戦　しかも限られた場所で戦う。
はつきり言っちゃえば正面きって倒せるだけの魔力を使えねえん
だよ。

魔力は有限、しかもそれを皆で分けて戦う。

それだけならまだしも魔力が枯渇したら打つ手が本当にねえ。
移動する場所がないんだからな」

「一瞬で勝負を決めようにも、例え辺りの魔力全部をつかっても志
木作の刀があるなら無駄でしょうしね。

どれだけ強力な魔術を放とうとも無効化されてはいおしまい……
だものね」

二人の言葉を受けて、考える。

確かにその通りかもしれない。

相性が悪いというよりも、斉藤先輩がこのルールに相性が良すぎる
だけで、なるほどそれならば俺が小隊長をしたほうがいいだろう。
相性がいくら悪いとはいえ、単純に防御に徹すればそうそう負け
はしない。

だけど、だけどもだ。

「それは分かった　けどどうやって勝つんだ？

それだけだとジリ貧だろう？」

俺がそう訊ねると修介はそれが問題なんだよなと言い。

「今ざっと考えてみたけどよ、どうにもいい手がねえ。

妥当なところでいやア、周りをぶっ潰してから数の暴力で沈めるの
が一番だろうけどよ」

そういう修介自信の眉がひそめられている。

それがいかに厳しいか、だ。

こちらは一年生。あちらは二年生。

魔術に携わった時間というなの明確な差がそこにはある。

便りの修介や岬も魔力の制限がある以上は限界がある。

勝てるか？と考えるとどう考えても厳しいものがある。

思考する　何かいい手はないか？

魔力の制限がなければ簡単に答えはでるだろうけども、ここにおいて魔力は有限である。

有限である以上取れる戦略の幅は　待て。

一つだけ妙案を思いついた。

「分かった、小隊長をやらせてもらうよ」

区切り、そしてもう一つ続ける。

「それと提案がある」

その提案を切り出すと大多数のクラスメイトの驚きもしくは落胆のざわめきが聞こえ、しかし理由を説明するとそれはなくなつた。

「俺はかまわねえけどよ、勝てんのか？」

訊ねる修介に大きく頷いた。

話し合い（後書き）

誤字脱字報告、感想お待ちしております。

1章が全部おわたったらこの作品の文字数を修正したものを新規に連載（こちらの更新もつづけて）します。

予定ではページを結合し5000文字前後で1ページとする予定です。

間章 先生

ゴーストタウンと呼ぶのがふさわしいだろう。戦争の長期化により放棄された町、整備されずでこぼこになったコンクリートの道路。

暗く、はっきりと見通すことが出来ない視界の中、そこに長身の男がいた。

身につけるは白のコート。しかしこの闇の中ではわかるのはそれだけ。

男は右手を顔の横にやり、

プッププツというコール音が聞こえた。

「どうも、国王陛下」

敬いなどカケラも感じられない言葉を放った。

侮蔑していると捉えられてもおかしくはないその声色、言葉遣い

しかもその言葉が本当ならば相手は国王である。

だというのに会話は続く。

敬語が交えられたその言葉はしかし無理をして使っているような雰囲気を感じさせ、あたかも獣が本能を抑えて話している様を彷彿させる。

「ええ、はい……いつも通りに殺しましたがね。はあ、強かったかですか？」

ふむ……なるほど、俺に任務が来るあたり強かったですな。

所謂天才ってやつでしょう、少なくとも俺よりは強かったとは思

いますな。

まあだからこそ負けて死んだのは皮肉としか言いようがありませんがね」

そういう男の足元には一人の青年が倒れていた。

雲から顔を出した月が一瞬照らし出したそれは 武蔵国軍中尉

本庄政義のものであった。

彼はこう呼ばれていた。

希望の光、と。

しかし彼は死んでいる。

これといった外傷は見当たらない、だが彼は死んでいるのだ。

心臓は既に活動を停止し、脳は既にその機能を果たしていない時間がたてば体は冷え切り、死後硬直も始まるだろう。

月はまた雲に隠された。

「 は？ 生かしておいた方が有益だったか、ですか？

知っているでしょうに、天才というものは競い合う相手ではないのですよ。

高め合う存在ではなく、魔法使いとは別の意味で異端。

こういう敵を生かしておいても百害あって一利しかありませんな。

いえいえ一利なしって言葉は知ってますよ。

ようするにあれですな。

99人が殺されて、1人だけが逃げ延びて ああ化け物はいりんだなと学習するわけです。

ま、魔術戦なんてものはタイマンが基本ですからその程度では化け物でもなんでもないんですがね。

ようするに1対1で99回勝てばいいだけですから。

本当の化け物は100対1で勝てるような奴ですよ」

そういう男、声色に変化はなく、ただ厳然たる事実を告げるように話し続ける。

この場に第三者がいればあるいはこう思っただろう。

どちらも化け物だろう、と。

「化け物をしっているような口ぶりだな、ですか？

はははっ、そんな人間がいないのは国王陛下もご存知でしょう？
まあ、あるいはそうなっていたかもしれない人間は知っています
がね。

そいつは復讐にいきるためにその可能性を捨てましたよ」

そういう男の声色に一瞬だが感情らしきものが浮かび出た。

あまりに小さな感情で、それがどんなものだったか判断することはできない。

何より男自身が理解していないだろう。

「化け物は生まれながらにして化け物だろう？

なるほど、確かにそうですね。

しかしそれならあいつは化け物ではないということですかね」

再び声色が戻り、

「は、少女ですか？

ああ、なるほど嬢……いや、彼女ですか？

あれは化け物なんて恐ろしいものじゃありませんな。

一人じゃ生きられない化け物なんてものは存在しませんよ。

何よりそうでなくともアレなら殺せますからね」

電話の先、国王がもらしたであろう笑い声がスピーカーより吐き

出された。

「ま、そんなじゃそろそろ切らせてもらいますかね。

おっと、いつも思ってたんですがね　こんな携帯電話なんてチャチなもんを連絡手段にしているんですかね？」

盗聴、機密性そういったことをさして男はいったのだろう。

それに対して国王は答えた。

構わんよ、盗聴でも傍受でもなんでも好きにさせてやるがいいさ！

すればするほど戦うのしかないのだと、戦い続けるしかないのだと彼らは理解するだろうからな！

スピーカーからもれた、若さを感じさせるハリのある声は確かにそうだった。

「なるほど……理解しましたよ、まあそれじゃ今度こそこれ　で？」

は、どうかしたんですか？

いい忘れていた？

ほう、なるほど競い合いですか？

いやしかし何故それを？

そんなもの別に珍しいことじゃないでしょうに。

はあ、きな臭い、ですか。

何を言いたいか理解はしましたが不可能ですな、俺は今武蔵にいますので。

は、いやそれは確かに国境近くではありますがね、しかし国境と違って南北で離れていましてね。

帰還するには三日はかかりますな。

第一、俺が得意なのは1対1のみですよ。

そういうのは魔法使いにでも頼んでくださいな。
では今度こそこれにて」

プツンという音。

そこで男はああと気づいた。

そういえば坊主はあそこにすすんだか、と。

雲がまた途切れ、一瞬だけその男の素顔が視認できた。

しかしその一瞬でそれが誰だか判断できる人間はいなかった。ただろ
う。

否、一人だけいるかもしれない。

一人の青年だけは気が付くだろう。

そうして彼は言うだろう。

先生、と。

間章 先生（後書き）

予約掲載機能を初めて利用してみました。

本当は間章をいれるつもりはなかったのですが……いつの間にか書いてました（あ

いやまあ、必要な描写もありましたしどこかでは入れなきゃいけなかったのですが。

先生の初登場ですかね（最初のは記憶だったのだ）。

とはいっても姿の描写はほとんどありませんが。

小説情報を変更しました。

いつも通り感想誤字脱字お待ちしています。

昼休みに

「斉藤先輩、申し訳ないのですが体育館をお貸しいただけませんか？」

頭を下げた頼む。

シンと静まり返った生徒会室。

「……構わんが、今日にどうしたんだ？」

視線だけを上げると、すこしだけ渋い顔をして斉藤先輩が。

ああ、この前職権乱用っていつてたつけそういえば。

なるほど悪い事を訊ねた　けど、必要なことだ。

しかし、これは言わば斉藤先輩に抗するための技を復習するため

で　なんと行ってごまかせばいいのだろう。

そう考えていると、後ろにいた修介が。

「なんてことはないっすよ、ようするに軍祭の練習ってやつですよ」
「　っ！？」

直接的にはいってはいない、いってはいないが　その意味を悟
られないだろうか？

いやそんなことよりもまずは己の表情を整えるべきだ　動揺を
見取られてはいけない。

ゴクリとつばを飲み下し、表情は平静かと自問し、そして大丈夫
だろうと判断を下した。

そうして顔を上げた。

「なるほど、良いだろう存分に使ってくれ」

そう苦笑していった斉藤先輩の表情。

まるで仕方がないなどでもいっべきそれに、こちらの意図したことを汲み取られたかどうかを読み取るうとして。

出来るだけ対等な条件で戦いたかった、でいいかね？

そう言った斉藤先輩を思い出した。

「……………」

カタンと小さな音を立ててパイプイスから立ち上がる斉藤先輩。ズボンの右ポケットに手を入れ財布を取り出し、それを開き緑のプレートがつけられた鍵を取り出すと、こちらへと歩み寄ってきた。

強いんだろう、強いはずだ。

差し出される鍵、手のひらに載せられたそれを手に取るうとして止まる。

情けない。

自分の手札をさらけ出した斉藤先輩に比べて俺は何を考えている。

「 斉藤先輩」

手を伸ばす 鍵をつかみ、

「今度は勝たせていただきます」

「……ほづ？」

ニツと笑ってそう答えた斉藤先輩、おもしろいとも言いたげに。宣言布告はここに完了した。

「おーおー、青春つてやつか？」

「いやー、若いわねえ」

と、ここで冷やかしを入れてきた二人に、はあと同時に嘆息をついた。

「……おっと、言い忘れていたが今日は放課後に巡回がある。

時間が大丈夫ならば参加してもらえないかな？

出きれば二人に仕事の内容を紹介したいのだが」

「あ、はあ……俺は問題はないですが 修介は？」

「ハッ、あるわけねえだろうが」

「だ、そうです」

では放課後に鍵を返してくればそれで構わない、といってくれた斉藤先輩に一礼して俺たちは生徒会室を退出した。

体育館に修介と二人で入り、鍵を閉めた。

先導するように歩く修介についていくと、修介は中央につくなり振り返り尋ねてきた。

「で、練習に付き合ってくれなんていったんだから、なんかあるんだよなア？」

何も無いなんていわさねえぞ？

あるんだろ切り札が、自信をもって勝てるだなんていう以上はよオ？」

その言葉に首を横に振る。

切り札、か。

切り札といえるものは己が格闘術と16へいたる魔術のみ。

そのどちらも斉藤先輩には相性が悪い。

格闘術はいわずもがな。

魔術は 恐らく唱えている間に切り捨てられるだろう。

だから、切り札というべきものは ない。

ない、ないのだが。

「切り札なんて上等なものはない。

だけど一つだけ使えるものがある」

「ア？」

そう斉藤先輩がいった通り、相性の問題なのだ。

だからこそ使えるものがある。

「ハイリスクだけどさ 代わりに正面切って戦えるようになる」

肉体を強化することだけが強化魔術ではない。

一部を組み替えることも強化魔術なのだ。

…… ああ、それともっと大切な事。

霧島流を使うからこそ、だ。

昼休みに（後書き）

いつも通り感想、誤字脱字おまちしております。

霧島流

拳を構え、深呼吸を一つ。

「この距離でやんのか？」

彼我の距離は2　これは俺の距離だ。

だというのに修介はむしろ望むところといった表情をしており、何か対策を考えてきたのかもしれない、だが、

「いや、20メートルくらいは離れたい」

この距離では意味がない。

ああそつだ意味がない　斉藤先輩とは接近戦になるだろう。だが、接近戦でこれをやるのでは意味がない。

「了解した、神野。」

アア、やる前に聞いとくけどよ　お互い手加減はいらねえな？」

つまりは試合という名の殺し合い　俺はこくりと頷いた。

ギリギリの勝負でなければ意味がない。

そつでなければ何の意味もない。

反転し、背中を見せる修介。

「今度は勝たせてもらうぞ？」

その背中に言葉を返す。

「いや、今回が初めての勝負だ」

「ア？」

「あれは自分の実力を確かめるための戦い。

今ここでするのは　霧島流神野森人の戦い、だ」

その答えに後姿でもわかるほどいぶかしげに首をかしげる修介。

「……霧島流、ねえ。

この前テメエがいていた捌く砕く避けるっていのがそれじゃねえのか？」

「確かにそれが霧島流の基本だ。

けど、それだけじゃない」

「……ハッ！」

クルリと視界の先で修介が反転しなおした。

相對する　距離は確かに20。

「グダグダと話すより　一戦交えたほうがよっぽど分かりやすい

だろ、オイ！」

「違うない！」

　　獰猛な顔で吼えた修介。

　　示し合わせたわけではない、だがそうであることが自然であるかのように。

「霧島流　　神野森人」

「魔術師　　御堂修介」

名乗りあい

『いく、ぞー!』

咆哮しつつも思考する

おそらく勝負は5秒もあればケリがつ

く。

お互いの魔術の手数は2

そうなる状況を作り出す。

一手目。

「身体活性化」

「肉体強化を開始する」

唱えるは強化魔術　驚きはない、俺に対して魔術障壁を維持するメリットがないからだ。

ならば初めから強化魔術を行使し、加速した世界で距離を保ちつつ戦ったほうがいい。

どうよ!

そういいたげな修介の表情に、しかし甘いと言葉に出さず思考した。

体感速度が変わらないまま、加速した世界。

下準備はここに完了。

だからこれより戦闘が始まる。

残りは一手、それで勝てなければこちらの負けだ。

否、恐らくそのときには負けている。

上半身を倒し、前傾姿勢。

口を開く修介と同時、こちらも足を踏み出し、

「土よ顕現」

「リミットオフ」

修介より先に詠唱を終え、

爆発的な加速。

ギチ、リ、と筋組織が悲鳴を上げる。

踏み出すは只一步のみ。

だがその踏み込みは神速。

一足で5メートルを詰め、そして幾分減速させるも勢いを殺さずに二歩目！

人間が使える筋肉はいせいがい30%程度、それがリミットだ。だがそんな枷は魔術でとっばらっつてしまえばいい。

しかしこれを使い続けることは不可能　一瞬が限界だ。

身体能力が向上している状態で使う以上その負担も増大する

故にこの魔術が使えるのは只一步のみ。

魔術が終了した二歩目にはもう加速する力はない　だがその速度を出来るだけ殺さずに地を蹴る。

「な　ん」

修介が発した驚愕の声はそれだけ、驚愕の声は途中で挑戦的な声色に変わり。

「火柱を　」

魔術の切り替え　それを確認し、三歩目を。

左足に力を込め、しかしそれは減速のため。
グツと速度が落ち、そして彼我の距離は既に5。

この速度では己が距離に踏み込むには二歩が必要だろう。
だからこそ 最初に加速したときと同じように前傾姿勢を取る！

「 顕現す！」

周囲の魔力が希薄になり、魔術の完成を意味した。

殺った！

そう確信するかのような修介の表情。

それもそのはずだ、魔力の集まる範囲が俺と修介の間すべてを埋
めている。

加速し距離をつめようがあたり、ましてやここにいても当たる。

不可避かつ防御不可 単純ゆえに強い。

だからこそ、俺は自分の勝ちを確信した。

轟と音を立てて、召喚された炎の柱。

「なん、だと？」

顕現された炎は目の前で燃えていた。

驚愕の声は修介が魔術をはずしたもものからくるものだった。

霧島流（後書き）

いつも通り感想誤字脱字報告をお待ちしております。

戦闘の説明話なのでいつも以上に先頭にスピードがないorz

勝敗

既に魔力は希薄、反撃に耐えうるレベルの魔術は生み出せない。故にこれよりは格闘戦。そして俺の土俵だ。足を踏み出し、残りは一步。仕掛ける、ぞ！

「霧島流近接格闘術」

左手を前に、腰を落とし、右手を極限まで引き戻す。

構えるは己が武術。崩掌。

修介にとって焼きついていてであろう一撃。一撃必殺の己が技。

「崩」

技に、しかし修介は両手を胸の前でクロスすることによって受けようとし。

「掌、とでも言うと思ったか？」

一度見せた技である以上、警戒されるのは当然。むしろそれを逆手に取らせてもらう！

さらに半歩踏み込み伸ばした左手で修介の服を掴み引き寄せ。なっという修介の驚きを置き去りにして引き寄せた勢いを活かし、右足で足払いをかけた。

そのまま宙に浮いた修介の体を、左手ごと地面に叩き付ける。

「がっ！」

空気を吐き出し、衝撃によって現状が把握できていないだろう修介に向かって右拳を振り下ろし、

「……クソ、が」

それを修介の顔の直前で寸止めした。

以前の戦闘において強化魔術においてのみはそこまでの差はないことが分かっている。

つまりは入れば決定打だったはずだ。

「俺の勝ちだ」

「チツ……ああそうだ、俺の負けだ」

そう認めた修介は、しかし 眉間に皺を寄せたまま、

「アレか、まんまと一杯食わされたってわけか？」

いや、二杯か 途中のこっちの魔術を避けたアレ、アレもこっちのことを逆手にとったって訳か。

違うな、アア、違うな。

逆手に取ったのは違いないが、それでもこっちの魔術は本来あったはずだ 何しろ止まっても当たるように魔術をつつたんだからな。

神野、テメエ何をした？」

その問いに、左手を修介の服から離し、右手を修介に差し出し助け起こしつつ、考える。

つまりは自分が生み出した炎で見えなかったってことか。

見れば一発で俺が何をしたかなんて分かるはずなのだから。

「魔術はつかってないぞ？」

「ンナもん魔力が消費されなかったんだから分かってんだよ」

立ち上がった修介の瞳はゴマかさざず早く言えといている。

タネ明かしは簡単だ 何しろすぐにでも出来る。

「何をしたか、までは見せれるけども どうやってやったかまでは教えられないから、多分見ないほうがいいぞ？」

「アン？」

「いや、霧島流格闘術って名前の通り、俺が作った武術ではなく先生に教えてもらったものなだけだな。

先生の教訓というか命令でこういう技は教えられないことになってるんだよ。

……けど、まあ 多分軍祭で斉藤先輩と当たった時に使うからな、そのときに見てれば多分分かるぞ？」

第三者の視点で見たことを試行錯誤すれば、それが実戦に耐えるレベルかはおいておいておそらく答えにはいきつくだろう。

何しろ格闘術というのは魔術師のものではなく、人のものなのだから。

「……ハッ、わぁーっ たよ、そんな時まで答えは待ってる」

「悪い」

「けどよオ？そん代わり勝てよ？」

あの生徒会長に打ち破られるような何かを理解さえできませんでしたってことになったら情けないってレベルじゃねえからよオ？」

「当然、勝つさ」

言いつつ、しかしこれもまた切り札足りえないだろうことを理解している。

修介と斉藤先輩ではそもそも戦闘スタイルが違う。
とはいえ手ごたえはあった。

勝敗（後書き）

申し訳ない、今回短いです。
感想、誤字脱字報告お待ちしております。

生徒会室へ

「……………、なあ由井？」

放課後、俺はとある物体の隣で、そのさらに隣にいる由井に問いかけた。

「ん〜？」

ふあつ、と伸びをしてこちらに向きつつ由井　その顔があーあ
とでも言いたげな表情になる。

「無理無理、私は嫌だかね？」

「俺だって嫌だ……………っと、岬は？」

イスの上で振り返ると岬は笑っていた　うん。

「聞くまでもなかったですね、はい、いえその、申し訳ありません
でした」

その笑顔が何を聞こうとしているの？　死にたいの？とでもいつ
ているように見えて、正直恐ろしかった。

「まあ冗談はさておいても……………それ、起こさないとダメでしょうね」
ぐるりと再度それに向き直り……………かわらずそれはそこにあった。

「一応いつとくけど、それ寝起きはものすごい機嫌悪いから……つとごめん神野、そういえば私たち今日一緒に下の商店街のケーキ屋さんにいく約束してたの！」

「ああ……そういえば今日が前に話してた特売の日だったわね、ごめんね神くん　そういう訳で私たちは行くわ」

そう言っただけで本当に教室からでて行った岬達……それはいい、いやよくはないけどそれはいい！

それを見る……熟睡している。

6時限目の半ばからSHRの最中もずっと寝ていたそれ　御堂修介が目の前にいた。

気持ちがよくさそうに寝ており、人が少なくなり静かになった教室では小さな寝息が聞こえている。

起こさずに済めばいいとは思うものの、この寝方はそんな気配を微塵も感じさせない。

……起こすしか、ないのか？

いやでも放っておけばそのうちおきるという可能性も　ダメか、今日は見回りについていく約束がある。

起こすか……起こすしかないか。

ではどうやって起こす？

軽く揺さぶってあたかもなにもしてなかったようなそぶりをして自然におきたんだよー的なことを装おう……ダメ、だな。

信一先生にSHR中に大声で呼ばれても起きなかったようなやつだ。

と、なると普通に起こすしかないか？

ない、よなあ。

「おい修介、起きろ　生徒会室にいくぞ」

肩を揺さぶり修介を起こしにかかる　果たして修介はそれだけ

で体をびくりと震わせ、二三回身じろぎをした後こちらを向いた。

「チツ、アアツ？」

こちらを見据える表情はまさに猛犬のそれ。

だから起こしたくなかったのだ。

自分が起こされる場合機嫌が最悪になるから放置したかったのだ。

「チツ、クソ、でなんだよオイ？」

「だから、今日生徒会室によばれてるだろ？」

「アー、アーアー、そうな、確かにあったなア、そんなのがよ……チツ」

「ああ、だからいくぞ割と時間くっちゃまったしさ」

チツと舌打ちをした後、わあってるよと言った修介は鞆に道具を詰め込み、それを持ち上げ、

「アアークソ、んじゃさっさといくとするか？」

彼の不機嫌な時間は終わりを告げたようだ。

生徒会室、修介と並び立ち、扉をノックしようとしたところで。

「……ふむ」

逆に扉が開いた。

合わせて下がった俺たちの視界には斉藤先輩が。

「丁度いいタイミングにきてくれたな。」

差支えがなければ鞆を生徒会室において早速見回りにいこうか？」

生徒会室へ（後書き）

今回はちょっとだけ日常パートを。
ご意見感想に誤字脱字報告お待ちしております。

見回り 生徒会長

「とはいえ、だ」

見回りの開始から十分、屋上から順に、四階、三階、生徒会室のある二階、と見ていき、まさに生徒会室の前まできたとき斉藤先輩はそう言った。

修介と二人、その背中を追いながら話しを聞く。

「見ての通り、格別何かがあるわけではない。

実際俺がこの見回りをするのは二年目だが、何か事件を目にしたことは数えるほどだ。

まあ、生徒会が受け持つのはSHRなどの中心となる北西棟のみ……だということも理由のひとつかもしれないがね。

無論、見回りとは名ばかりのものではないのだが ふむ、丁度いい実例があつた」

そういう斉藤先輩の顔は窓 いや、その先へ向いていた。

その方向へ俺も顔を向けた。

目を凝らし見据えると、なるほどそういうことかと理解できた。

「へえ？」

隣で聞こえた修介の声は楽しげなものだ。

「だがまあ……二階と一階の見回りが終わっていない、あそこにくるのはそれからいいだろう」

そしてそういう斉藤先輩の横顔は優しげに微笑んでいた。

一階の見回りまで終えると、斉藤先輩と共に件の場所　体育館
脇の室外プールへとやってきていた。

聞こえてくる声　楽しげなそれらを聞きながら、俺たちはプー
ル前の鉄格子の前に達、斉藤先輩がマスターキーでそれを開けた。
備え付けのシャワーがある通路ではなく、その隣のプールへと直
接つながる階段を上ると　そこには予想通り複数人の男女がいた。

「げっ！」

その中の一人、こちら側に一番近い場所で泳いでいた男子がそう
漏らすと視線がこちらに集まった。

そこにつづるのはすべて同じで、しまったとでもいいたげな表情。

「何が、げっ、だね？」

そう訊ねる斉藤先輩に、最初につめき声を上げた坊主頭の男子が、

「あっははー、何がだろっなー？」

しらじらしい声色でそういう彼に、斉藤先輩は、はあとため息を
つき。

「で、許可はとっているのかね？」

問われた坊主頭の男子は再度あつははーと笑うと、

「取ってると思うか？」

「いや、全く思わんな　で、許可はとっているのかね？」

「いやはや慧眼の通り、全くとつてないわけですなこれが！」

「……ふむ、そうか　ならば仕方がない、罰則を与えよう」

「三時間以内にこのプールを掃除し、俺に報告してくれ。

この後俺は生徒会室で雑務をこなす予定だからおそらくはそこに
いるだろう、でなければ北西校舎の職員室だ。

ああ……そうそう俺はこう見えても忙しいからな、こちらで多少
の騒ぎをしてもこれないかもしれないので注意してくれ」

後ろにいる俺たちには斉藤先輩の背中しかみえない、だが聞こえ
る声色のそれは、生徒会室まで聞いたときと同じものであり、隣
の修介のほうを見ると、修介もこちらを見据えており、ふっ、と笑
って肩を竦めた。

あくまでも好意的な雰囲気で行われたそれに、俺は修介は良いや
つなのだなあとあらためて思った。

普通に考えればこの時期にプールに水がはってる訳がない　何
故ならば今が五月だからだ。

あるいははってあつたとしてもそれは汚れきつた水だろう。

だというのに彼らが入っているプールは当然水がはっており、な
おかつ清潔だった。

恐らくは魔術、だろう。

何をしたのかまでは分からないが、ここに清潔なプールがある以

上は片付けも容易だろう。

時間にして10分かそこから それに対して三時間の猶予と最後の言葉。

ようは片付けさえすればお咎め無しであそんでもいいぞと、そういうことだろう。

「さすが生徒会長殿！

懐が深い！」

坊主の男子が今までの表情を取り払って、喜色にそまった顔でそう言った。

続くように他の人たちが斉藤先輩をたたえる言葉を言い、それに斉藤先輩は苦笑した。

「何をいつているかが分からんな 俺はただ罰則を与えただけだぞ？」

「ともかくありがとー斉藤くん！」

そう言ったのは女子生徒、どうやら話しの間にごちらのほうへ寄ってきていたらしい。

プールサイドちかくまできた、茶髪でショートカットの彼女は白いビキニタイプの自らの水着を指差し、

「ところでこれ似合ってる、かな？」

それは、隠している面積が一般のビキニと比べ少ない、扇情的なもので 俺だったら答えに困るだろう。

だが斉藤先輩はふむとつぶやくと。

「似合っている、似合ってはいるのだが　如何せんポリウム不足ではないかね？」

……大真面目な声でそういった。

反射的にショートカットの女子の胸を見る　確かに、と思わずいいそうになった。

Bはあるだろう、だがCはない。

「あははー、言うと思った！」

いやもう本当斉藤クンって正直だよなー。

それが美点なだけだよさ」

笑っていう彼女は初対面であろう俺から見ても魅力的だった。

……キレイとかそういうんじゃないで、自然にわらってるからだろうか？

「ありがとう。」

そろそろ見回りに戻ろうと思うが、くれぐれも掃除のことは忘れないようにな」

くるつと反転し、俺たちのほうへと向いた斉藤先輩。

苦笑をしつつも、まあこんな感じの仕事がメインだと言い、一問を空けて行くこうかと促した。

「あ、すみませんーっだけいいですか？」

「……む？」

「ああいえ斉藤先輩にではなくて、先輩？方になんですが」

「おー？」

坊主の男子がそう答えた。
ずっと気になっていたことがあるのだ。

「寒くないんですかー？」

今は五月だ　暖かくなってきたとはいえ水温はまだまだ低いだろう、さむくはないのだろうか？

そう思って訊ねると、肩をポンポンと叩かれた　修介だ。
顎で示されたのはプール。

「水をよく見てみる」

境界線、そこを注視してみると、なるほど。
俺が頷くと、坊主の男子はそうそと笑って。

「これ温水なんだよ、まあぶっちゃけ魔術つかって最初に暖めただけだけだな？」

と、斉藤と見回りしてるってことはお前ら噂の一年坊か？
ま、いろいろと大変だろうががんばれよなー」

坊主の男子、改め坊主先輩の言葉に俺と修介はありがとござい
ますと言った。

俺のものは多分ちょっと恐縮がまざり、修介のものは照れがまざり
っていた。

「さて、そろそろ次に行こうか？」

「はい」

「うっす」

見回り 生徒会長（後書き）

一つお尋ねしたいことがあるのですが、この物語に登場する人物は人間味があるようにできているのでしょうか？

それが気になっています。

と、いつも通りご意見ご感想、誤字脱字報告お待ちしております。

好きな人がいた

「……次は体育館だ、そのあとは」

「斉藤先輩、よかったですか？」

プールから出て、鉄格子をの鍵を閉めずに出た斉藤先輩の声を遮り、訊ねた。

「よかった、とは？」

「それは……」

訊ねたのは俺だというのにその質問に詰まった。

何か良い言葉はないかと思考して、

「ここが魔術師の 殺人者を育てる場所だつてのにいいのかって聞いている……なのであつてるよなオイ？」

代わりに修介が訪ねていた。

情けないと思うと同時に、申し訳ないとも思い それを読み取つ

たのか修介は。

「いやまあ、俺自身気になったから訪ねるんだけどな？」

で、いいんですか？ 生徒会長殿。

そりゃまあ？ ここが普通の学校つてんなら美談でしょうけど？

ここ、人殺しを育てる魔術師の学園じゃないすか。

んで聞きたいんですけど、んなぬるい事やってていいんですか？」

「……ふむ、神野君も同意見かね？」
「修介ほど過激ではないですがね」

首肯しつつそう答える　流石に殺人者だからだとかいうつもりはない。

そうだな、と斉藤先輩はつぶやいて、歩き始めた。
その背中を追うように歩き始めると、斉藤先輩はもう一度そうだな、とつぶやいた。

プールと体育館の間、その間を埋める校庭の砂を踏みしめつつ耳を傾ける。

「良くないな　そうだな、良い訳がない。

極端な話し、ここは軍人として使える人間を　いや駒を作るための学園だからな。

こんな余分なものはないほうがいい　当然のことだな」

そういう斉藤先輩、しかしそこには個としての意見がない。
修介もそう感じたのか、

「それで？　生徒会長個人としてはどうなんで？」

斉藤先輩は語る。

「答えはもうプールで出しているだろう？」

「くっ、はははっ、なるほどなるほど！
そう言われてみればそうだよなあ！」

気が付けば目の前には体育館が、そして斉藤先輩はおそらくマスターキーで鍵を開け、ガラリと扉を開いた。

「入ってきてくれるかな？」

靴を脱ぎ、体育館へ。

室内用のシューズはもってきていないので靴下だ。
俺たちが体育館に入ると、斉藤先輩は無言で鍵を閉めた。

「アン？」

「……む」

その行為に戦闘態勢とまではいかないものの警戒心を抱く。

こちらに向き直った斉藤先輩は苦笑し、

「そう警戒しないでくれ 単に人に聞かれたくない話だからこ
こを使わせてもらうだけなのだから。

さて、さっき見てもらった通り、あれが俺の 生徒会の方針だ。
そしてさっきの質問だが 先ほどのような回答ではなくしつか
りと答えてみようと思う。

とはいえ俺はしつての通り、その、なんというか口下手なのでな。
なんといえは伝わるのかが分からない。

だから、ただ自分のことを語ろうと思う 多分それが答えにな
るからだ。

生憎とおもしろい話ではないので退屈させてしまいかもしれない
が聞いてくれ。

……そうだな、語る前に一つだけ先に言っておこうと思う」

「俺には昔好きな人がいた」

そういう斉藤先輩の顔には、苦笑ではなく、後悔が現れていた。

5年前

斉藤恭介は首都の大和に住んでいた。
己が住むは父の邸宅。

大和城に近い場所だというのに数百メートルに渡って続くそれは、
斉藤恭介の父 斉藤さいとう 恭司きょうじのもつ権力を示していた。
中将である父 恭司を恭介は嫌っていた。

だが、父は絶対で逆らえない だから今日も父に命じられた通り大和城へと足を運んだ。

(国王陛下が私になんのようなのだろうか)
石垣が続く中、石垣の上、視界の先ぎりぎりに見える天守を見据え恭介は考える。

分からない、分からないが、事前に逆らうなと父に命じられたことから、まともなことではことだけは想像が付いた。

「考えていても仕方がないか」

そう見切りをつける恭介。
何故ならば考えれば考えるほどマイナスな思考が思い浮かび、不安になるだけだったからだ。

ふむ、とつぶやいて視界を前に戻せば、視界の奥に正門が見えた。おおよそ2キロにわたる石垣の終わりを見た恭介はようやくかと思いい、同時、片側で1キロということは合わせて4キロ。

直径が4キロで正方形なのだから、石垣も含めた城の面積は16平方キロメートルといったところか。

それだけの面積を囲む高さ10メートルほどの石垣、そのすべてに對魔術加工をされている。などと大和広しとはいえここだけではないだろうか？と恭介は考えた。

恭介が正門に入ると、迎えのものが来ており、すぐさま国王の間へと案内された。

「やあ、斉藤の」

だがそこには国王はいなく、豊の先、上座にいたものは、

「殿、下？」

胡坐を組み、頼杖を書きながら恭介を見据えているのは きみし 君島

まやまこ 大和王子。

歴代で唯一の国と同じなを持つ王族で、歴代で唯一の白髪の王族で、そして歴代で唯一の

「あーあ、斉藤の　かたつくるしい挨拶をその先続けようってんならいらんぞ？」

そういうことのために呼んだんじゃあないからな」

「……では、失礼します」

そういう大和に対し、なるほどと思いつつ恭介は豊の上に正座した。

下座であり、距離は10メートルほど離れている。

若干話しにくい距離ではあるが、だがこのくらいの丁度いいのだらうと恭介は思う。

距離感だ、と。

背筋を伸ばし、しっかりと大和を見据えつつ　　恭介は大和を観察していた。

そうしてもう一度なるほどと思った。

確かに同い年には見えないな

あちらもこちらと同じく12歳であるはずだ。

だが既に大人ほどに伸びている座高、人を食ったような表情、何より肩まで伸びた白髪が12歳であることを否定している。

「くくつ、白髪が珍しいのか？」

「いえ、そんなことは」

「ふむ？　表情は嘘はいつていないな　　まあ、隠すのが上手いだけかもしれないが。」

はてさて、ならば何故俺のほうを必要以上に注視していたのかと考えると。

くくくつ、まあ簡単すぎてアホでも分かる答えだわな。

なあ斉藤の、魔法使いというものは珍しいか？」

そう、君島大和は王族で初の、そして唯一の魔法使いである。

「希少な才能だとは思いますが」

「くくつ、物はいよいよだな。」

素直に言えばいいだろう異端だと。

それともあれか？化け物と呼ぶのが正しいのかな？」

「……そのようなことはありません」

大和の言う言葉はすべてが正しい。

魔法使いとは、魔術では実現できないものを生まれながらに行使

できるものを指し。

それを人は異端だと、化け物だという。

もっとも恭介がそうおもっているのかは別問題で、むしろそれが本題なのだが、

「ま、そんなことはどうでもいいんだがな。

本題に入ると、だ」

だというのに大和はそう言い、そして、

「なあ斉藤の？」

「は、」

訊ねた、とある人物のほうへ視線をやりつつ。

「女性を待たせるのはどうかと思うぞ？」

そういう大和の視界の先、5メートルほどの距離。

恭介から見ても同じだけの距離があり、しかし恭介と同じように中央に座っていたのではなく、恭介からみて右手側に座っていた少女がいた。

だからこそ恭介はおそらく自分はここがいいのだろうと判断したのだが。

「失礼しました、私は」

「 斉藤 恭介君、だよな？」

恭介の声を遮り、少女がそう呼んだ。

「はい、その通りです」

頷いた恭介に、少女は体育座りから立ち上がり、薄い胸に手を当て、

「私は、遠藤 黒百合」
名乗り、そして、

「わ、私と友達になってくれませんか？」

少女はそう言った。

間章 王子（後書き）

お盆ですこしだけ実家に帰っていました。

携帯で投稿するから問題ないかなーと思っていたのですが充電器を
持っていくのを忘れてできなくなりました（あ

一週間の休載、本当申し訳ないです。

間章 その少女は、

「お友達……に？」

そう、少女は確かにそういった。

見据える、見つめる、見通す。

目の前にはおそらく自分と同じくらいであろう12〜14才ほどの少女。

踵まで伸びた美しい黒髪、整い、そしてつつすらと化粧をされたその容姿はお姫様としかとらえようがなく だからこそ恭介は自分が呼ばれたのか？と思った。

中將の息子、齊藤恭介 姫君の友達役としてはちょうどいい位だろう。

そう打算で判断し、首肯しようとしたまさにそのとき、大和が、魔法使いがこう言った。

「くくくつ、それが契約の一部だそうだ 否、これこそが契約」

目の前の少女はお姫様などではない。

そう理解した、理解してしまった。

王子は、大和は、契約を結ぶ。

それこそが大和の魔法。

絶対の契約

契約内容を施行させるものではない。

契約内容を違反した場合の罰則によって施行せざるをえないものとする それが絶対の契約。

矛盾、絶対でありながら破ることができるというものは。

だが、それでもこれは絶対なのである。

罰則 違反の対価は基本的に己が死、だ。

死を賭してしか契約を破棄することは敵わない。

故に絶対 命を賭せる人など存在しない。

それを、結べというのか？

だが、それに対して大和はクククツと笑い。

「何を考えているか分かるがな、斉藤の？

それは違つとだけ言っておこう。

何、契約などと言ったがな？

これは魔法ではない、ただの言葉。

口上での約束だよ。

いやなに、端的に行つておもしろかつたのでな？

魔法使い 己が命を預ける対価に求めるものが友達などとは。

クククツ、理解できないな。

ああ、だからこそおもしろい。

だからこそ魔法などで縛つてしまつてはつまらない。

だから、繰り返すぞ斉藤の？

それは違つ。

これは魔法ではない、契約でもない。

まあそんなものは俺が王子である時点でなんの意味もないがな？

さてどうする、斉藤の？」

訊ねられ、我に返つた恭介は しかし考える時間はあまりないのだと理解していた。

時間はない、それでも思考する。

ああ、だがそんなものはまるで無意味だったと先に述べておこう。何故ならば、

「む、無理はいいません」

そう言った少女が、己よりも小さく、儂げで、

「い、一週間で、一週間だけでいいんです」

そして何よりもそう繋げていった少女の言葉が恭介の胸にささったからだ。

ここに打算は、父の思惑も、王子の思惑も、そして自分の思惑も

なにもかもがなくなった。

だから恭介はあたまをさげたのだ。

「こちらこそお願いします」

と。

苦笑する斉藤先輩

「とは言っても俺自身、友達というのがいなかったのにな。

何をすればいいのか、いや、何をしたいのさえ分からなかった。それは彼女も同じようで、だから、その、なんだ？

お見合いのように見詰め合って、暫くして殿下に爆笑された。

暫く笑いこけた後に、殿下が意見を言ってくれた。

「晩考えたらどうだ？」と。

それに従い、では明日と言って俺は部屋を退室した。

……さてこれで彼女との出会いは終わりだ」

斉藤先輩の父親のことや現在の斉藤先輩のこと、気になることはいくらでもあるが、今はすべて捨て置く。

そして話を聞くうち、一つだけ分かったことがある。

結末、だ。

俺はその物語の結末を知っている。

それに斉藤先輩が関わっていたかは知らなかったが、その少女の結末は知っている。

死んだ、殺された、生贄になった　その全てが答えだ。

「今でもはつきり覚えている。

ああ、そうだ。

ワクワクしながら家へと戻り、使用人に遊びを聞きまわった。

あまつさえあの父親にさえ訊ねたな。
もつとも仏頂面で私に聞くより使用人に聞いたほうがいい、など
と言われたがね」

そう苦笑しつつ言う斉藤先輩。

だが、少女は死んだ。

それだけは変わらない。

死んだのだ、名前さえ残っていない魔法使いは。
故にここにあるのは悲劇だ。

「……………」

沈黙、言葉はない。

「……………終わり、すか？」

修介の言葉に斉藤先輩は首を横に振り、いや、と言った。

「どう話したのかと思ってね。

……………そうだな、端的に言って 初めからこけたというべきかな？
ふふっ、いやなに、今話した通り 何せ待ち合わせ場所を決め
てなかったのにな。

一日かけて城を探し回ったさ。

お昼前から探しまわったというのに、見つかったところには日が落
ちていたよ。

それが傑作でね、彼女の話を書くにお互い入れ違いに探し回って
いたようだな。

ああ、そこ回ったんですよー！と言った感じで悔しがる彼女の姿

がとても魅力的だった。

あーだこーだと探した場所と時間を言い合っているうちに、ふと彼女が笑って言った。

これってかくれんぼみたいですね？と。

俺は闇に染まりきった空を、城の中庭から見上げながら違いないと笑った。

お互いにひとしきり笑ったあと、ふと気づいた。

百合というのは花で、その花言葉を知らないということに。

だから俺は彼女に訪ねた、貴方の名前の意味はなんですか？と。

そう訊ねると彼女は苦笑して、しかしその苦笑も一瞬後には消えて　また先ほどまでの笑顔に戻ると、秘密です、とそう答えた。

そういわれると余計に気になるもので、しつこいくらいに訊ねたのだが、それでも答えてくれなくてな。

その……それで俺はふてくされてしまっただけな。

そんな俺に対して泣きそうな顔でごめんなさい、と言った彼女にあわてていやいやぜんぜん気にしてませんからなどと言ったあたり、単純だったのだろうか……

その、話しがずれたな　話を戻そう。

その日は解散、明日こそちゃんと遊ぼうと誓った。

今度は集合場所と時間を決めて、な。

ああ、これから四日間は何も無い。

彼女とただ遊んだだけだ。

鬼ごっこ。

かくれんぼ。

かけっこ。

オセロ。

大富豪。

レパートリーとしてはこれだけだったがね。

ああ、それでも本当に楽しかった。

初めての友達、初めての遊び。

朝から夜までずっと二人で遊んで　とても、たのし、かった」

「……、その、あとは」

言葉に詰まった斉藤先輩にそういつてしまったあと、言うべきではなかったと後悔した。

俺は、答えをしっているじゃないかっ　！

「いや、すまない　これで初日を含めて六日間がすぎた約束の週間まであと一日。

この日をやり直せたらと何度も、思っ」

苦笑する斉藤先輩（後書き）

予約掲載していた文がのっていなかったということに驚いておりま
すorz

タイムアウトしてたのに気づかなかったんですかねorz
こういつつっかりはへらしたいです

間章 魔法使いの少女

「……嫌、だな」

城を囲む石垣にそって歩きながら恭介はそうつぶやいた。そうだと、恭介は思った。嫌なのだ。

い、一週間で、一週間だけでいいんです

嫌なのだ。

今日で一週間、今日で終わり。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ　そう、嫌だ。

斉藤恭司の息子、斉藤恭介としての思いではない。自分自身からくみ出される気持ち。

……友達、だからだ。

初めての友達、初めての遊戯。

ああ、そうだ。

それが一週間で終わるなんてことに耐えられない。

そう恭介は思った。

ふむ、と恭介はつぶやく　どうやら考えているうちにたどり着いたようだ。

足を速める　視界の先には門があり、そこを越えれば彼女がいるはずだ　そして彼女遠藤　黒百合がそこにいた。

黒百合の後ろ、軍団の最前列にいた人物　　斉藤恭司を見つけたからだ。

「……あはは、約束の日、だからね」
「……………」

恭介には目の前の現状が理解できなかった　　否、しなかった。

い、一週間で、一週間だけでいいんです

必死な言葉　　何故一週間だったのか。

沈黙、黒百合も恭介も何も言葉を発しない。

あたかも言葉を出してしまえば何もかもがこわれてしまうかのよう
うに。

「……………恭介」
「は、い」

だから恭司は口を開いた。

「彼女は魔法使いだ……言っていることが分かるな？」
「……………分かり、ません」

恭司は言葉をつむぐ。

「彼女は視覚を、触覚を、感情を他者と共有することが出来る魔法使いだ……言っていることが分かるな？」

「……………っ、分かり、ませんっ」

その返しに、恭司は控えていた黒百合の後ろから恭介の前へと歩み出て、

「武蔵には英雄がいる　　1対1を繰り返すのならば文字通り一騎当千の英雄がな。」

こちらも英雄を当てれば勝てないわけではないだろう、しかし勝てないかもしれない。

かの英雄さえ落とせば形勢はわが国に傾く。

こちらの英雄が落とされれば形勢は武蔵に傾くだろう。

だから、確実に勝たねばならない。

そして彼女は共有の魔法使い。

言っていることが分かるな？」

「分かり、ませんっ！」

分かってたまるものかと恭介は心の中で吼えた。

嫌なのだ。

今日で一週間、今日で終わり。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ　　そう、嫌だ。

斉藤恭司の息子、斉藤恭介としての思いではない。

自分自身からくみ出される気持ち。

……友達、だからだ。

ここにたどり着く前、最後に考えたこと。

今日、言おうと。

一週間限りではない、ずっと友達でいよう。

「大和は魔法使いの少女を殺し、死の瞬間を英雄に共有させること

で英雄を討つ　言っていることが分かるな？」
「っ、分かりませんっ！」

「……大和は武蔵に兵の質で勝り、武蔵は大和に兵の数で勝る。

だが英雄が一人いるだけでそれは代わる。

兵の質で劣ることになり数でも劣る。

はつきり言おう、現状において大和は武蔵に負けている。

劣勢だ　ああ、認めようとも」

恭司の言葉に周りの兵士がざわめく。

当然だ、その言葉は中将斉藤恭司の言葉だったのだから。

「これしか方法がないなどというつもりはない。

他にも方法はあるだろう。

だがな恭介　それを探す事はできない。

そんな希望にすぎることとは出来ない。

そんな希望に国民の命を賭けることは出来ない。

ここに人の感情を差し込むことは出来ない。

こうすることが最善の方法だからだ。

もし、大和がこのままでも勝てるのならばこんなことは言つまい。

だが人が足りない、錬度が足りない。

故にこのままでは勝てぬ。

そしていずれはこの大和にも戦火は及ぼう。

だから繰り返し返すぞ恭介。

ここに人の感情を差し込むことは出来ない。

こうすることが最善の方法だからだ」

間章 魔法使いの少女（後書き）

次回で終わり……の予定です

間章 少女は言った

「分かって……たまるかつ！」

ぐっ、と恭司を見据え、恭介が吼えた。

「最善！？ 最善って何ですか、女の子に全部押し付けて、自分の無能をひたかくしにしてっ！」

そんなものが最善の訳がない！

ああ、分かってます　これが子供の言い分だっことは分かっています！

それでも、それでも、だ！

そんな大人の都合のために、大切な友達を差し出すなんてことは出来ない！」

吼える、吼える、ただ吼える。

蛮行なのは百も承知、無謀なものも百も承知。

恭介はただ一つ心に決めた。

彼女を救う、と。

「……………そうか、分かりたくないか。

それで、どうする恭介？　のた打ち回るのは簡単だが、現実には変わらない。

現実を変えるためにどうする？

もし戦況を変えうるだけのアイディアがあるのならば、私は地に頭をつけてお前に請い、彼女を解放しよう」

そういった父親^{恭司}に対して息子^{恭介}は答える。

「 決まっています、ああ、決まっている！
知った事か！

私に、いや、俺にとって大切なことは彼女だけだ。
だから、決まっている。
アンタを倒して彼女を連れだす」

それは初めての反抗だった。
否、反抗という言葉は生ぬるい、それは敵対だった。
拳を構え、半身になり、恭介は左足を半歩踏み出した。

「お前が、俺を……か？」
「俺が貴方を……だ」

対する恭司は拳を構えることさえしない。
なによりする必要さえもない。
何故ならばそれほどまでに恭介と恭司には差があるからだ。
中将たる恭司は、人脈や策略なども用いてそこまで上り詰めた。
だが恭司が中将たる由縁は何よりもその実力だ。
対する恭介は子供だ。
才能はあるだろう。
努力もしているだろう。
師にも恵まれているだろう。
だがそれでも、実力も経験も何もかもが恭司に劣っている。
桁が違うのではない、位が違う。

「無理だ」

恭司が断言する。

「それでもだ」

恭介もそれは理解している、だが、それでも、だ。不屈、不退　絶対に認められるものか、と。そんなことは絶対に認められない。

「……そうか」

構える必要はない　しかし恭司は拳を構えた。半身になり、右足を半歩踏み出し　それはまるで恭介の鏡のようで。

だからからこそ、とそこにいた兵士は思った。経験、実力　そのどちらも劣っている恭介に勝機はない。

「　ありがとう、恭介君」

張り詰めた空気、少女がそういった。

呼ばれた恭介は、しかし、泣きそうな顔をした。

間章 少女は言った（後書き）

……おわりませんでした（土下座

いろいろとすることができちゃいましてorz

ものすごく短いですが今回はこれで。

次回は簡潔する……はず

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7818/>

神野森人は拳で戦う

2010年10月16日13時36分発行